明治三十年四月十日

女學雜誌

第四百三十九號

第四百三十九號目次

社告

●本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの○

●單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば其望に應ずべし

女學雜誌定價表

前金	一冊定價　金拾錢（無郵稅） 一ヶ年前金　金貳圓
廣告料	一行一回（廿十字詰）前金十錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし（郵便切手にて送る人は九厘切手にて且つ一割增を添ゆべし）
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

第四百三十八號目次

英國倫敦モールス製造會社製造
金銀側龍頭卷懷中時計

廣告の委細は左の英文を見るべし

製造元廉價直販賣廣告

EXTRAORDINARY OPPORTUNITY.

FROM THE FACTORY DIRECT TO THE CUSTOMER.

OUR Company is selling *direct* to the customer, thus procuring for the latter a double economy, namely, the profit of the wholesale dealer, and the more considerable one of the retail dealer, amounting to from 5*s.* to £10 upon a single watch. Retail watch-dealers and jewellers, usually selling but a few watches daily, are forced to make an extraordinary profit upon each one sold in order to defray their general expenses.

We manufacture as our speciality only sterling silver or gold stem-winders (keyless watches).

The keyless mechanism of watches is one of the most important and useful inventions of modern times. Instead of fumbling in one's pockets to find the key, which when found is most always filled with dust—this of course being transferred to the watch—one has but to turn a knurled button fitted to the pendant (or ring), thus winding the watch and regulating the hands by the same means.

Our watches are everywhere recognised to be the best in the market, surpassing all others by the precision of their movements as well as by their accuracy and cheapness.

Our factory, since its foundation in 1852, has acquired a world-wide reputation, and obtained the highest awards from all the important Exhibitions. No watch leaves our factory without having been carefully examined and verified, thus being ready for immediate use. Each one is put up in an elegant silk-lined case, and accompanied by a warranty for three years.

The buyer may return any of our watches within six months should the latter not afford him the most complete satisfaction.

All articles sold are delivered post free, and custom duty paid to any part of the world, thus without the slightest trouble or formality to the receiver.

All repairs during the 3 years of guarantee are executed gratuitously, if the watch be forwarded to our London office.

The following are cash prices without discount:

	Yen.
A. Stem-winder, sterling silver, hall marked, jewelled in 6 actions, crystal glass, a strong and durable watch.	3
AA. The same with double silver case (Hunter), elegantly engraved...	5
B. Gold stem-winder, hall marked, strong keyless action, jewelled in 13 actions, with gold or steel hands small second dial, engraved in beautiful designs, engine turned or plain polished, with monogram, initials, arms, etc...	10
BB. The same as B, with strong double gold case, an excellent and very elegant timekeeper...	17
C. Royal chronograph, 18 carat gold, most superior key-less movement, of the most accurate workmanship, and one of the best wear-resisting watches...	20
CC. The same watch with double and extra strong case, 18 carat gold, artistically engraved, engine turned or plain polished, with monograms, initials, etc...	32
D. Imperial calendar chronometer, 18 carat gold, indicating the day, the week, the month, and date of month, jewelled in 18 actions, with all the latest improvements and inventions, one of the best and most magnificent watches manufactured, such as are never sold by retail dealers for less than £25...	50

All our watches are manufactured in 2 different sizes, large and small (for gentlemen and ladies), without difference of price.

Old watches, old gold and silver will be taken in payment at the highest value, if forwarded by parcel post to our address.

Remittances may be made either by Postal Order, Cheque, Bank Notes (postage stamps for small amounts) of any country, in registered letter.

It is our aim to give the utmost possible satisfaction to our clients, knowing this to be the best advertisement for our products, and all who have ones entered into business relations with us gladly recommend us to their riende and acquaintances.

Address for letters and orders:

MORSE MANUFACTURING COMPANY,
7, RED LION COURT,
LONDON, E.C.

☞ Wanted at once, in every locality, an intelligent person to act as our Agent. No special knowledge required, and without interfering with present occupation. Highest salary and commission. An excellent opportunity for a capable young man or lady.

本會社は顧客諸君に直販賣の道を開き居れば、問屋、小賣人等によりて多額の利益を貪らるゝをなきによりて、廉價を以て精良堅牢なる懷中時計を購入し得らるべし。

價格は銀側時計にて三圓より五圓、金側時計にて十圓より五十圓に至る、其五十圓の金側時計の如きは、時計小賣商より購入せば、少くとも百五十圓を要求せらるゝ品なり、保險は三ヶ年間附す。

送金は、郵便爲替、振出切手、銀行爲替いづれにてもよろしく、書留郵便を以てせらるべし。

製造販賣元　英國ロンドン府、レッド、ライオン、コート七番地　モールス製造會社

藤弘之
山
花 大
合 利 安
山 雅

社會雜誌

冊子と爲すの価なけり矣……け且つ一の完結を適かなる……

講孟劄記』は松陰先生が編纂、非凡の眼識を以て『孟子』を縦横に論評したるものにして其如何に精微を極めたるものにして又如

は蕃山先生『源氏物語五十四帖』の淫靡淫蕩の小説にあらざるを論證し我國中古の禮樂制度文物の淵源を求めざる可からず。若し夫れ院散以下各種の中に存するを講明せしもの街も光彩を加ふ。江湖諸彦請ふ一本を購讀して如何に我が『陽明學』の價値あるかを知れ。

臨學叢覧……大野雲潭
源語外傳、外科…熊澤蕃山
古本大學講義……山田方谷
中庸小解……熊澤蕃山
論語講義……鈴木無隠
講孟劄記……吉田松陰

（定價）
一部十錢 六冊五十錢 十二冊壹圓七十錢 廿四冊二圓八十錢 外に郵税毎冊一錢 郵券代用は割増 本院宛にて牛込局

東京市牛込區新小川町二丁目十六番地
鐵華書院

吉益亮子　津田梅子



瓜生夫人繁子　デロング夫人　植田貞子　大山侯爵夫人捨松子

日本最初の洋行女學生



徳川慶喜公の母堂（水戸烈公の室）

女學雜誌
第四百三拾九號
明治三十年四月十日發兌

社說

家庭の春

春は樂しきものなれども扨て實際に能く之を樂しむもの幾許ありや。詩人之を形容すれば、如何にも艶麗至極の有様なれど、其の風景を實地にして、現に其の面白味を味ふものは至つて少なし。つら〳〵惟ふに人生の家庭も亦た斯の如き歟。之に春あらざるはなし、而も能く其の春を樂しむものは、何程もなし。これ抑も何故の遺憾ぞや。

凡そ春の花にあくがれ、一日の遊散にても心置なく催さんとするには、夙に其の心構へありて、十分の用意を爲ざる可らず。左なくんば、一年數日の花の盛りは、夢の間に去來して、心緒未だまとまらず、今日か明日かと思ふ間に、一夜風忽ち起り、爛熳たる万朶の枝、俄然として元の鞭の状態とはなるべし。古人其の恨を歌ふて曰く、花見て暮らす春ぞ少なきと。春の少なきにはあらず、兼てよりの用意の足らざるが故なり。もし夫れ家庭に春風を來して、其の麗はしき花に和樂せんと欲するものは、亦た同一様の覺悟なくして可ならんや。春は、秋霜、烈冬の後に來り、花は一年の養ひによつて暫らく煥發す。もし其の準備と素養とを鄭寧にせざれば、何をもてか能く春を迎へ花に樂しむとを得んや。一日の安樂は千秋の困苦に胚胎す。人生の事安くんぞ輕々しき僥倖をもて期すべきものならんや。

見よ、心に憂ひあるものは、春の温光に接しても心地よしとせず。花の壯んなる裝を見ても、むしろ之を痛まんとはする也。況してや、心役々として遣り繰りに追はれ、覺悟の無きによりて亦た餘裕あることなき族に於ては、たとひ春來れりとも徐に歡ぶとなく、花咲けりとも其の風雅を味はふとなし。斯の如くば、人生遂に春風なし櫻花なきと何の相違ぞ。凡そ心中先づ春風なきものは、心外の駘蕩たるものと

相接せず、情懐に餘裕の花なければ、枝上に咲けるものと相應ずるはなし。畢竟先づ人に求むるものは、其心にあり。故に亦先づ家に求むるものは、家をつくる人の心掛如何にある也。

蓋し室家の幸福を求むるは人情の當然なり。されど、幸福を幸福として求むるときは、遂に幸福あるとなし。經に曰く、患難に欣喜を爲し、心の貧しきに幸福を生ずと。凡そ人の奴たらんとして初めて能く人の主たるとを得べしとせば、人終極の幸福を得んが爲めに何を爲す可き乎は明白ならん。室家の人皆な交々幸福を求めば、其の幸福は何人より供へらるべきや。室家の人常に斷えず幸福を求めば、其の幸福は何の時に養はるべきや。一年の勞苦を了へて僅かに一日の花を觀るべし、平生の素養なかりせば、安くんぞ能く其の悅びに會せんや。

近時家庭團欒の必要を説くもの多し。抑も誰か之を必要とせざらん。團欒の爲に條件を算ふるもの多し、亦誰か之を否むとをせんや。左れど、家庭團欒の第一要素は、家族銘々が克己献身の決意にあり。もし皆な交々安樂を求めて、些細の不

愉快をも物憂しとせば、如何なる家庭と雖ども久しからずして破裂せんのみ。如何にして其の安きを維持せんや。故に若し家庭團欒の必要を感ずるものあらば、其人率先して深く決意し。先づ一身を獻げて、家庭の幸福を持ち來すべき犠牲となるべし。一人先づ己れに克たば、他の數人は久しからずして又た克己すべし。之を一人先づ利己にあせりて、忽ち他の數人の之に傚ふに較べて、如何許りの懸隔ぞや。人心の感應は微妙にして、善惡ともに傳染に急なり。一個人の心の表裏如何によりて、一家吉凶の根本をつくる。愼しまざる可けんや。

試みに、親子夫妻相携へて、いとも樂しく花見に遊ぶ歡樂を見よ。何ぞ其の睦まし氣にして殊勝なるや。左れど是れ一日の故にあらず。彼等無理に同伴して叱咤して、一日の遊散を爲さんに、何等の愉快あらんや。平生互ひに辛棒し、銘々己に克ち、人を仕合せにんとて、吾身を勞したる至誠の交通し、一家則ち和樂あり、一同皆な滿足の思あり、顏に不平の筋もなく、心に秘め置く憤りもなく、則ち洋々悠々として、徐歩して花下に逍遙するなり。其の準備、其の經營

に一日の故ならんや。花見の衣裳は數日にして縫ふとを得べけれども、其の着心を好くするは數年の骨折りなり。辨當のお菜は粗末なりとも、之を山海の珍味の如く賞玩せしむるものは、別に無形の味ひあれば也。一家十年の困苦を經て、家族すべて和ぎ、一年の心構恰好にして今日ゆるりと花見に出れば、枝上の花亦た風霜雪雨の昔を忍びて、今日を盛りに装ひ、樹上樹下、花相映じて、人と春と互ひに感交す、人生の美之に及ぶものは尠し。嗚呼春風は捉へがたけれど、之を抱くとを得べし、花は散り易けれども、之を念ひがたきにあらず。ことしも亦、花を見て暮らすとの出來ずと言ふ乎。乞ふ暫らく家庭の春の去來に念じて、徐に團欒の花の開落を思慮せよ。古人曰く、花落ち花開く亦た心に關すと。况んや、家庭の花の榮枯に於てをや。

深山木の其梢とも見えざりし
さくらは花にあらはれにけり　　頼政

講義

雛の孵化

小農夫

春は新に養鷄を始んとするもの丶、遁すまじき好時機なり。二、三月は雛の孵化に、最も適したる折にて、また四月に入ると雖も、なほ遲かるまじければ、此際之に志あるもの丶、手引として、聊か斯業の經驗家に就きて聞き得たる、安全且簡易なる、雛の孵化法を説かん。

◎巣鷄の撰擇

雛を孵化せんとならば、第一に巣鷄を撰擇せざるべからず。巣鷄としては、羽毛の厚く、脚の短く、性質の柔和に慈愛深きものを撰ふべく、而して多くの卵を抱かしめんとならば、躰軀の大なるもの必要なれども、亦餘りに大に過ぐれば、巣に就きて、身躰の自由ならざるが爲めに、時として卵を損ずるの憂ひあれば、可成く躰の輕きものより撰ぶべし又一度も

しくは二度雛を孵化せし經驗あるものなるべし。巣鶏に適したるは、オコッケー（オコクともいふ）を第一とし、九斤（交趾）、レグホン若しくは通常の日本種家鶏之に次ぐ。闘鶏は性激急なればよろしからず。

既に巣鶏となすべきものを得たる時は、其果してよく巣に就くや否やを試みんが為めに、假りに一二日間一個の卵を抱かしむべし。直ちに其卵を抱くやうならば、至極結構なれど、中には中々巣に就かで、雞舎の外に出たがるものあり。さればとて雞舎の戸をしめ置きても、直立して屈まぬものは、折々静に手にて其背を壓へ付くべし。それにても屈まぬならば、此度は風呂敷様のものを雞舎の上に被ひて、光線を遮り、鶏をして夜間にあるの思ひをなさしむべし。是迄の手段を施して、二日も過ぎたるに、なほ巣に就かぬものは、孵化用たるに適せざるものなれば、更に他の巣鶏を求むべし。

◎卵の撰定

巣鶏を撰ぶと同時に、また孵化せしめんとする卵の性質並に其良否を撰定せざるべからず。

先づ養鶏の目的のいづれにあるかを定むべきなり。

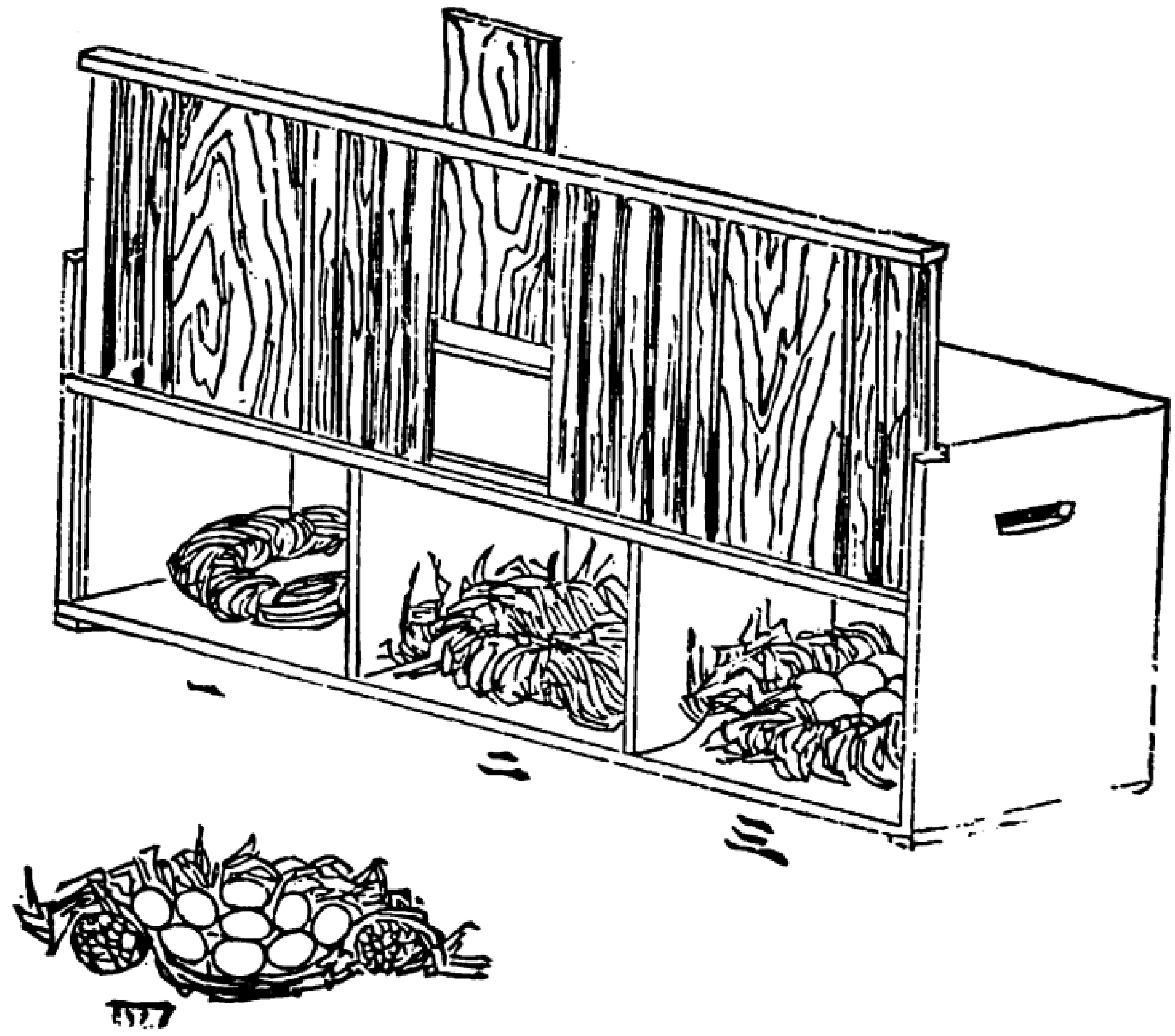
其目的主として愛翫にありて、傍ら卵を採り、また肉をも獲んとするにあらば、ブラマ、ラフレッシユ、レッドカップなどを最とす。然れどもブラマの如きは、寒地の飼養には適當ならず。また主として採卵の目的ならば、白色單冠レグホン、並にアンダルシヤンを宜しとし、中に就てもレグホンを最も優れりとなす。採肉用としては、ブラマ、コーチンなどの如き肥大種を優等とし、また肉用採卵兼用には、ワイアンドット、プリマウスロック、ドーキングなどあり。此等の卵は其目的に應じて種鶏業者より求むべし。卵の良否を撿定するには、其方法あることなれども、こは熟練なる養鶏家の知る所にして、素人には中々に曉り難ければ、これ亦信用ある種鶏業者に就きて、新鮮良好なる卵を購入するの外なし。

卵によりて、孵化すべき鶏の雌雄を知るの方法には、二三の異説ありて、長めなるを雄とし、短く丸めなるを雌とするあり、また重きを雄とし、輕きを雌とするもあり、各其理あることなれども、初めて養鶏せんとするものなどには、迚ても此等の標準によりて、卵の雌雄を判ずることは難し。されど熟練なる養鶏家は、自家の經驗研究の功勞を以て、よく

其判別を立て得るなり。

◎巣の構造

巣鶏の撰定を終はり、良好の種卵を得たるときには、早速孵



化を始めしむべし。扨て巣箱としては、蜜柑箱の少しく大きなるものを用ゐてよし。箱の底にスグリ藁、若しくは打藁にて、釜敷の如きものを造りて入れ、其中に、また同様の藁を、窪く巣によろしき風に入れて、其上に塩梅よく、卵を並ぶべし。上圖に示せるは、三個の巣を有せる鶏舎の形にて、一は釜敷の如きものを造り入れたるさま、二は、一の上に打藁を布きたるさま、三四は二の中に卵を置きたるさまなり。巣の造り方は大畧圖の如きものなり。

然るに爰に巣の構造に就きて、一の秘法あり。此法によれば、恐るべき羽虫の害を除き、また孵化に必要なる濕氣を、手數を要すること少なくして、適度に供給することを得べし。其方法は、巣箱の底に泥土を一面に二寸計りの深さに入れ、其上にスグリ藁を敷きて、その上に、凡そコーヒ匕に一杯ほどの分量の硫黄末を、滿遍に散布すべし。かくしたるものゝ上に、通常の法によりて、釜敷様の輪、スグリ藁を置き、卵を入るべし。此構造法によりて生する利益は、左に述ぶるが如し。

第一、卵の孵化せんとするには、充分の温度と共に、多くの濕氣を要するものにて、熟練なる巣鶏は、採餌の為外出する際に、羽に水分を附着せしめ、巣に歸りて之を卵に與ふるな

り。此故に養鶏家は時々卵を取出して、之を微温湯に浸すことをなす。然るに以上の法によるときは、巣鶏の躰温によりて、漸々下なる泥土の水分を蒸發せしめて、濕氣を卵に與ふるを以て、また微温湯に浸すの手數を要せず。

第二、羽虫の害は、恐るべくして、而も巣鶏は多く此害に罹り爲に充分孵化の功を果たさゝることあり。また首尾よく孵化したる雛も巣鶏の羽虫に感傳すれば、衰弱して成育し難し。故に此害は養鶏家の孵化時に於て特に患へとする處なり。羽虫の生ずる所以は、多くは巣鶏の糞の掃除の行き届かざるによるものなれば、この害を避けんが爲めに、糞の掃除を怠らず、度々藁を取り替へまた巣箱及び巣鶏の翼、頭など（腹部は避くべし）に石油を點布するを可とす。されど彼方法によるときは、巣鶏の躰温よりて、漸次に泥土を蒸發せしむる際に、藁中に散布し置きたる硫黄の氣も騰りて、羽虫を驅除するが故に恐るべき彼の害を蒙ることなし。巣箱の掃除も、十三四日位に一度行へば可なり。其際には全躰の藁を取り替へ、硫黄末は從前の如くに散布し置くべし。尤も糞は注意してよく取除くべきも、度々敷き藁を取替ふるの必要なければ、至

極便利なり。

また地面を凹めて、其中に巣を造ることあり。こは最新の方法のよしにて、詮ずる處、前にいへる秘法と同様の手段を行ひ得べし。

◎抱卵中の注意

巣雛に抱かしむべき卵の數は、巣鶏の大小によりて相違ありて、多きは十三四個より、少きは六七箇位なり。其數は巣鶏に就いて見計らふべし。

巣鶏に抱かせたる後、四五日目よりは、時々卵を反覆し、また彼是と塲處を取換ふべし。如斯くするは、一様に温度を受けしめて、一齊に孵化せしめんが爲めなり。尤も巧者なる巣鶏ならば常に自ら此の如くする者なれども、なほ時々人工を以て之を補助すべし。又七八日目より始めて卵を撿分して、孵化し難きものを除くべし。熟練なる養鶏家ならば、四五日目にして、既によく卵の孵化の成否を判然し得べく、素人といへども、十三四日目には、明に知り得らるゝなり。之を知るの法にも數種あれど、最も簡便なるは、夜間ランプの前にて、卵を手に握り、明に照して透し見るべし。其の全く不

透明なるは、敗腐して、既に生活力を失ひ了りたるものなり、またよく赤らみて見ゆるは、雄鶏の精液を受けざるものなれば、到底孵化するものに非ず。而して黒きが中に何處となく赤みを帶びて見ゆるものは、即ち生活力を有して、孵化に堪へたるものなれば之を取りて、餘は悉く去るべし。

巣鷄に與ふべき食物は玄麥にて、青菜、ゴマメ、ニシン、鰻の頭などをも時々與ふべし。砂粒、貝の粉末などもきれぬやうに與へ、水は斷えず給すべし。

慈愛心深き巣鷄は、二三日間も巣を離れず、食を求めぬことあれば、さる時分には、靜に其腹部に手を挿し入れて、巣より出すべし。但し此際注意して卵を破損せぬやうにすべし。

◎續坐法

少數の巣鷄にて、多數の雛を得んとするには、抱卵を檢査して、良否の取捨をなすに、自然抱卵の數不足となる際、同時に抱卵しつゝある巣鷄、三羽ありとせば、甲の卵を乙丙に適當の數に分ち抱かしめて、甲には新規の卵を抱かしむべし。甲の抱卵を他に移さんとする時には、先づ新なる卵を二ッ三ッ入れ置きて、靜に先の分を取り出すべし。

また既に孵化しある後、直ちに、甲の雛をば、竊に乙丙の雛に混じて、甲には再び抱卵を始めしむべし。之を行ふには夜中または暗處を可とし、可成靜に且つ母鷄をして曉らしめざる樣になすべし。續座の度數は三回を過ごすべからず。度を超ゆれば巣鷄をして疲勞に堪へざらしむべし。またさなくとも巣鷄は衰弱するものなれば常に滋養分を給し、魚類肉類の屑、青菜を欠かさず與ふべし。又砂浴を怠らさゝれ。

續坐法を行はんとには、數羽の巣鷄をして、同時に抱卵を始めしめざれば不可なり。

◎雛の飼育法

抱卵二十一日にして、雛は孵化脱殼するを通例の定まりとす。脱殼後一晝夜は其儘巣箱の中を出づることなく、母鷄の腹下にて、濡れたる羽毛を乾かすものなり。されば此時間中は、未だ食餌を與ふるの要なし。而してまた同じ一腹の雛といへども、必ずしも同時に脱殼するものに非ずして、多少の遲速あり。嘴を殼外に出し乍ら、脱殼の鈍きものは、殼の堅く、水分の不足なるが爲めなれば、取り出だして、微温湯中に浸

し、静に殻を破り與ふべし。取扱方は穏になさゝれば、雛をして出血せしめ、爲に之を殺すとあり。されば一時に殻を取り去ることなかれ、漸次に時を隔て、樣子を窺ひながら少しつゝ破れ目を附け與ふるにてよろし。

孵化後一晝夜を經て、羽毛の乾きたる時、雛をして、始めて、就餌せしむべし。其節の食物として最も適當なるは、小米を暫時水に浸し、笊に揚げて水を去り、まだ濕り氣の切れざる中に、鍋にて炒り交せ、少しポロ／＼になりたる時、玉子の溶きたるを、振りかけて半熟に煮たるものを與ふべし。其分量は五勺の小米に、凡そ一個の玉子の割合にて、これ丈を一腹十疋程の雛に二日間に分けて五日間與ふべし。同時に小松菜の如き和かき野菜を細に刻みて與へ、またゴマメ、鰹の頭其の他の魚屑肉屑を與ふべし。但し鹽分多きものはよろしからず。水は一日に二度位取り換へ給すべく、水中には舊釘を入れ置くべし。

五日を過ぎたる後には、小米を其儘に與へて可なり。青菜、魚類の給與は欠ぐべからず。小米を與ふること五十日間にして、親鷄と等しき食につかしめて可なり。

雛の食餌には、胡椒及び砂粒を混じて與ふれば、消化を助け、下痢症に罹るの患なからしむべし。また木灰、蕃椒、硫黄末を與へてよし。

雛孵化したる後は、巣箱より出して、鷄舍に移すべし。鷄舍は茶箱の中番位のものよし。下には莚の切を布くべし。藁を布くべからず。藁は抓きさがすのみか、雛の足、之に纏はれて進退自由ならぬを、親鷄の誤つて踏み殺すことあれば、避くべし。莚は度々取り替へ、糞の溜らぬ樣注意し、また時々石油を點布すべし。雛は二腹位の數を、一羽の親鷄に預けてよし。また三十日目より四十日目の間にて、親鷄より離すべし。

孵化後一週間以上を經過したる雛は、天氣宜しき日の午前十一時頃より、午後三時頃までに、凡そ二時間程、外に出して、散遊せしむべし。追々日を經るに從つて、三時間或は四時間程放つべし。然れども曇天或は風雨の日また朝露のある間は、決して雛を外に出すべからず。

雛の飼養は、養鷄者の最も苦心注意を要する處にして、巧みに之をなさんとには、色々の方法あるべし。然れども詮ずるに注意と手加減とが第一なり。たゞに雛のみならず、抱卵中もまた成長したる親鷄にても、飼養上の注意に油断すれば、決して成功する能はず、また損失を來たらすべし。

以上は雛の孵化と其飼養法とにつきて、概畧を述べたるまでの事なるが、要するに新に養鷄を始むる人などは、注意に工夫を加へ、様々に實地の經驗を積みたる上にて、始めて自ら巧妙なるを得べし。

家庭

秘密内外の混同

何事にても打明けるを善きとの樣に思ふは僻事なり。秘すべきに秘せざれば、語るべきにも語らぬものなり。天眞爛熳と云ふ都合よき形容詞の下に、不作法、不覺悟を覆ひかくし、愼むべきにも愼まずして、神經質を修飾するは醜きとなり。

天地人生の万般のうち、秘密と云ふものは一種床しき味ひを生ずるものなるに、今人其宜しきを採らざるによりて、只だ悪しきとの樣にのみ思ひ做すこそ殘念なれ。試みに思へ、大凡そ上品にして趣味あるものは、皆な一種の秘密と云ふものを存するならずや、曰く、神秘、曰く、言ひがたし、曰く、玄黙無言など、惣じて最上の品德に屬す。

左れば、一概に秘密と云ふとを擯斥せず、但だ之を宜しきに用ふるの義を大切として、扨て、家庭の內外により此の義を異にするの勘辨を承知せざる可らず。曰く、一家の內に於ては成るべく一身の秘密を打あけ、家庭には秘密と云ふもの、無きやうにすべし。一家の外に於ては、一家の秘密を保ち、あまり家庭の神聖を曝露すべからず。之を要則とす。

すべて一家の人は一人の如し。互ひに隱しだてを爲る樣にては、益なき掛念を引起し、遂には無益の疑を生じ、家にして家にあらざる殺風景を醸すべし。吾が憂ひを告げて心配さするは氣の毒ゆゑと思ふもあらんが、憂あり氣にて打あけざるを見るほど憂はしきはなし。むしろ薩張りと言ふて仕舞ふに越すとなし。同憂は同情の媒にて、同情は親和の種なり。

家內にあり乍ら互ひに隱す樣にては、双方の不愉快此上なきのみか、第一、其人の氣も鬱し、人品も下るべし、人は如何ほど一方に鬱積沈痛せりとも、別に亦た豁然たる氣樂の所なかる可らず。之は家內に於て何事も打あけて話し合ふより得らるべきものゆゑ、一家の內には可成く秘密と云ふものの無きやうに致したきと也。

之に反し、一家內の秘密は秘密として外に漏さゞるは言ふ迄もなく、たとひ秘するに及ばざるほどの事にても、あまり之を家外に言ひ廣むるは宜しからぬとなり。親子互ひに思ふ熱愛の情、もしくは、夫婦濃やかに相慕ふ切なる交りなどが、偶としてチラ〱外に漏るるは、喩へば東屋の燈火を遥かに眺むるにも似て、太だ床しきものなれど、當人等の口より直ちに說法せられ、說法も其圖にのりて、喋々と辨ぜらるゝに至りては、寧ろ面白からぬと也。但し聽く人の面白からぬは扨て置き、本人の心中に於て先づ不愉快を感ずべき筈のものとは思はるるなれ。一家の內事は、之を秘し、之を圍み、一種の保護保存を爲し、家族丈にて互ひに窺き見て莞爾として微笑し、則ち愉快をも感ずべきほどのものなれば、抑も之を暴露するには忍びざる筈のもの也。專賣免許を人に與ふるものもなく、得手の秘密を人に明すものもなく、戀人との情懷を他人に說明するものもなきが人情なれば、家庭の秘密を世間に傳ふるに本氣の沙汰あらんや。

凡そ、秘密と云ふものに對する人の處置風如何にて、其人の人品と平素の覺悟との知らるゝものなれ。秘密を語り合ふ程の友なき人は心情何處にか淋しき所あるべし。秘密を守りて不傳の義を固くせざる程の人は、頼むに足らず。秘密と打明けるとの義を料理して、勘辨の宜しきを得るほどの事の出來ざるものは阿呆なり。惣じて、秘密の內外を混同せざるこそよけれ。

家政學の精髓

古老先輩に實地の家政を聞き、又は女學校の學科に一々の手段を學ぶなど、皆な必要の事なり。されど、應用は總べて時と所と位との變化に隨ひて宜しきを料るべきものゆゑ、初めより畫一の方を立て、何處にも當はまる如き手段を細說するとは出來がたきとなり。然るを顧ず、たゞ一通りに見聞學

知せし方法を万能と心得、何處にも一概に之を施さんとするによりて着々失敗す。家政學の稽古は單に其の方法を學ぶのみにては足らざる也。

左れば、家政料理の精神とも云ふべく、又、根柢ともなるべき切要の大道を聞くことを最要とし、先づ此の道の心得を學んで、之を吾身に躰し、所謂る道の自得より發して自然に事の宜しきに應ずる樣に處置するを、家政學を學ぶものゝ心得とす。

古へは、家に居て家政學を實地に學ぶ。故に其の學ぶ所は、單に家政の智識たるのみならず、併せて其鍛練たり。即ち、家政を爲すの道を吾身に躰得するの工夫も幾分かは行はれつつありし也。此の點より考ふれば、今の女學校の家政敎授に於て、單に其の智識をのみ與へて其の鍛練を與へざるに比較して、寧ろ優れりとす。

凡そ鍛練を欠ぎたる智識は、眞の智識にあらず。之を有するに似て實は有せず、否な有せざるのみならず、反つて生もの知りの癖として弊害あり。故に、家政學を學ぶものは、其の智識を聞きて、事々物々の手段を習ふと共に、更に其の根柢に入りて、其の精神を吸ひ、本來肝要の家政の「道」なるものを吾躰に自得するの工夫に趣むべし。而して、敎授するもの、講話するもの、同もに亦た此の覺悟なかる可らず。其の與ふる所、漠然たるらしきは寧ろ不可なし、道の觀念を自得せしむるの說話は概して漠然たるものなれば也。たゞ此の漠然寧不可なし、之を受けたるものゝ心中に活動して、其の發して事物に應ずる時や、恰好適中して、鏘然、金石の音を發せしむる如くならずば不可なり。然るに今の家政敎授は、反つて之と正反對せり。其の敎授せらるゝ時や、明晰にして一々事物に適當す、而して其の學びたるものゝ之を實地に施こす時や、惣べて漠然として要緊に中らず、之れ何の故ぞ。他なし、家政の「道」を學ぶことを廢して、其の「藝」を學ぶことにのみ偏するが故なり。

伯母樣

鷗村

西洋の讀本など見るに、子供の話や、家庭團欒の話には、お

母さんの次ぎに、伯母さんといふが、其中での重役となつてゐて、子供等は、アント某、アンチー某といつて、非常に懐き、第一の友達としてゐるのを見る。之によりて察すると、西洋での伯母様は、家庭の和平喜樂の一大要素となつてゐるらしく、彼讀本などに多く見える話は、其消息の一端を洩すと同時に、子供等に敎ふるに、伯母様に懐き親しむべきことを以てするものなり。

其實際に立ち入らば、西洋の家庭に於ける伯母様の地位は、果して如何やうのものであるか、よくは了知せずと雖も、兎に角西洋人の理想的なる家庭にては、伯母様なる語をして、小兒等の耳に、甚だなつかしきものたらしめんとするにて、されば又、父母は其姉妹と親密の情ありて、之を小兒等に示さんとするなり、こは甚だ慕ふべきの美風にして、我邦の家庭にも扶植なし度きものなり。伯母は、之を鬼千疋に匹敵するの小姑と稱へて、家内の不和の原因を惹き起す第一の動力となり、舅姑が嫁を嫌ひ出すことも、小姑が兎や角いふより、何程我子の嫁とはいへ、元は他人なれば、血肉を分けた我娘に見かへることはならず、可愛き娘のいふこと故、二度や三度は出過ぎた言ひ草とも思ひもせん、度重なれば、つい〳〵娘のいふに乘せられて、果ては共々に嫁の落度をば、鵜の目、鷹の目にて、穿鑿する樣になり、家内の不和紊亂遂に治すべからざるものとなるは、我國の家庭に於て多く見受けらるゝの狀態なり。されば嫁入するにも、あの家は、婿になる人は、至極よい方なれど、舅姑があり、其上に兄弟が澤山あるからと、二の足も、三の足も蹈み、就中小姑をば嫁入の鬼門の一に算ふるが常なり。西洋にても斯樣の弊風なきにしも非らざるべきも、此弊風を打破して、前にいへるが如き美風を蔓布せんとするが、一般の家庭の理想として重んぜらるゝなれば、從つて此美しき理想は、實際の美事となつて、伯母様が家庭平和の一大原因を形成してゐるの事實も、尠からず發見せらるゝなり。

されば如何樣になせば、伯母をして、家庭和樂の一大源泉たらしめ得べきかといふに、これはいふまでもなく、家族の人銘々の心掛けにあることにて、舅又姑は自ら制することは勿論小舅小姑のいらざる不平小言を取り上げぬやうになし、夫は妻を導き、又助けて、兩親兄弟との折合を計り、嫁は事々

ぬことを勉め、小舅小姑は、兄弟婿、兄弟嫁の落度を、成るべく見ぬふりに、之を取り上げて兎や角いはざるに在り。詮ずるに家族のものは誰もかれも一樣に、忍耐の誡を守りて、家內に平和を來らさんとするの念を忘るゝことなく、銘々其方針に心を用ゐるべく、殊に小姑等は、終始兄弟嫁の味方となり、助け手となり、助告者となり、親友として共々に親々兄弟に仕へんことを專一とし、甥姪の爲めには、よき伯母樣となりて、彼等を可愛がり、彼等に慕はるゝやうに仕向くべし。子供は家庭の人々を一致結合せしむるの鎖ともいふべきものなるに、伯母樣のその子供等をよく／＼可愛がるときには、兄弟嫁との仲は自ら親密になり、延いて舅姑と嫁との親しみを來らす次第とはなるなり。されどまた伯母樣のあまりに甥姪を可愛がり過ぎて、母の權利をのり越えて、彼等に我儘せさせ、實親のいふ言をきかぬやうにさせて、爲に一家に時々不和の波瀾を起すことも稀れならざる例なるが、これは伯母たるものが、考への淺くて。まだ家庭平和を計るとの足らぬが故なり。子供等の躾け養育には、父母を第一の責任者と立てゝ、伯父伯母は如何に甥姪の可愛くあるとも、父

母の下に立ちて、躾け養育に助言、助力すべきものなり。ただに子供に對するのみならず、兄弟嫁自身に對しても、其人が一家の主婦であるならば、主人に次ぎて家の首に立もの、此家の大黒柱の一なれば、小姑等は之れを長上の者と敬して、快く之に服從するの義務あるなり。然るを世の小姑は兎角、兄弟嫁をば、外から來たものゝ癖にと思つて、物事に目に稜を立て、綿を包める針を胸に藏めて、時々其の鋒を露はしたがるによりて、一家の不和を惹き起して、其結果舅姑は嫁をいぢめ、婿は怒り、嫁は離緣せらるゝなど、扨ても忌はしき騷動となる例少からざるなり。於玆乎、小姑はまことに鬼千疋なり。

繼母の繼子いぢめといふは、甚だ苦々敷ことなるが、然るにこの繼子いぢめなるものは、往々にして其實伯母樣の繼母をして、かの殘忍の行爲をなさしむるとあり。我が姉妹もしくは、兄弟嫁の遺子が、繼母の手にかゝるをば、可愛想に思ひ、いらざる掛念をして、竊に其子供を招いて、繼母の仕向け工合を聞き、また繼母を非難して之に聞かせなどし、隱して物をやりなどするが爲に、其子供の性質を曲げ、繼母との

仲を違はしむるとの積りくては、最には菩薩の如かりし良婦をして、時に變じて夜叉の如きの繼母とならしむることさへあるに至る。恐るべし、謹むべし。

小姑即ち伯母は、我兄弟の家庭の平安の爲めに、尠からぬ責任を有す。既に兄弟と別れて家庭を成せるものとてもこの責任は遁るゝと能はず、况してなほ兄弟と共に生家に在るものは殊更に此責任あり。而してよく此責任を守りて、よき小姑となり、よき伯母様たること能はずば、將來別に自ら家庭の主婦となるときに當りても、其家庭をして平和喜樂の府たらしめんとは、甚だ覺束なき次第なり。

堪忍の藥

山岡活石子

瑞西國のラングナウ村にミツヘリー、ジユツバツハとなん呼ばるゝ醫師ありき。此醫師は人々の病苦を愈すのみならず、總て人事万般の難みとし云へば、請ふに任かせて治療し、最も不思議に効驗ありたれば、門前日に市をなし、其名は遠近に聞えけり。或時一人の婦人來りて、其身の不幸を歎ちける樣、妾の所天は何故か妾を惡み、妾の事とし云へば何にまれ聞き咎め、言葉の中に毒を持ち、舌の頭に針を挿み、根も葉もなき事柄に雷の如き聲を上げ、稻妻の如き眼を輝かし、晝夜の差別なく妾を詈り、妾を叱し、時として鋼鐵の如き拳もて、妾を責めさいなみ、日より月、月より年と、一年三百六十日の其間、片時とても辛き目見ぬはなく、妾が天授の命數は、盜賊ならぬ妾が良人に奪ひ去らるゝ心地し侍べる。何卒良き治術もがなあらば教へ賜へかしと。醫師は婦人が其良人の行爲に付き網羅餘さず其多辯なるに驚きしかば、頭を傾けて暫時思案の躰なりしが、莞爾として婦人に對ひ言ひけるは、和女の不幸左程と思ひ遣られたり。幸ひ余に一良法あり、必す和女を困厄の中に救ひ申すべし。され共、和女若し細大余の命に從ひ玉はずば、不幸更に一層の大となりぬ可しと。婦人云ふ、其事に限り決して掛念し玉ふに及ばず、妾毫厘も違背仕らじと、醫師は是に於て、立て藥室に入り一瓶を取り、盛るに井水を以てし、苦味にして無害なる液二三滴を其中に注ぎ、再び出で來り、婦人に告げて云ふ、若し和女の良

人、事に觸れ怒りの摸様見ゆる時は、和女直ちに是れを凡そ水呑に半分程口に含み、耐へ能はざるに至る迄は決して吐出す勿れ。又決して飲み込み給ふな、而して其含むこと久しければ、如何なる猛き怒りとて雲霧の晴るゝ如く散り失せん。其時始めて水を口より吐き給ふべし、此の如く毎に其塲合を所置し給へば、長く怒の聲を聽くとなく、又怒りの眼を見るとなからん。而して和女の命數亦良人の爲めに奪はるゝともなかるべしと。婦人はこの奇藥を得、挨拶さへも倉惶に我家を指して歸りけり。程經て再び來り云ひける樣、其方樣の妙藥著るしき奇功侍れり。され共未だ全く妾を罵詈の苦域より救ひ出す迄には至り侍らずと、醫師云ふ、然らば以前より強味に處方すべければ、倘一瓶服藥し給ふべし、而して此度は必ず一時間を期して含み給ふべしと、婦人乃ち醫師の命を盟ひて去れり。一二日を經て又來り。妾彼の調劑を得仰に從ひ一時間含みし以來良人の怒り易きの疾は遂に全く愈えたり是れ全く先生の 賜 なりといひて、深く醫師の勞を謝し其術の妙を稱贊したりとぞ。

兒藍

思ひ出草（一）

さち子

『於母さん、あの姉さんが生きて居なしたから、何より大事にしてゐた、寄木の箱はどうしました。ソラ火事の時にはこれだけ持つて逃ればいゝのだと、云つていらつしやつたあの箱。』

『ほんにそんな箱があつたつけねー、姉さんがものはみンなまとめて二階へやつて置いたから、二階にありませうよ。』

『私やあの箱が欲しいわ、於母さんあれ頂戴な。中のものぐるめで。』

『中に何が入つて居るか、私やチツトも知らないから、まあ持つて來て御覽。』

靜子は二言をまたず、二階えかけ上り、やがて、大きやかなる箱を抱へて、下りて來ました。

『於母さんありましたよ、隨分重い事何がは入てゐるのだら

うあけて見ましようか。』

下に置く間もなく、靜子は手早くふたをあけて見ますと、さすがは子供の時から、仕末の好い子と譽められただけの姉の箱、這入つて居る物は數々違たものではありますが、或は箱の中袋のうちと、きまり好く並べてありました。

『オヤオヤ、何だかいろんなものが、澤山は入つてゐる樣だね。その一番大きい包みは何だね。』

『お母さんあてゝ見ましようか、小切でしよう。ソラ當りましたろー、マアある事〳〵よくもまあ、こんなに集めましたねー。こんな小いきれを何にする積りだつたのでしよう、柔かいものばつかりこんなに。』

『アーそう〳〵、それは澄が學校を退る時、朋輩の方々が下すつたのだつけよ。あれが細かい仕事が好きたものだから皆さんが、御秘蔵の小切を一つづゝ角の處に名を縫つて、澄に下さつたのだよ。之れをみンなはぎ合せて、何にかにして、いつまでも學校の事を覺えて居て下さいつてサ。』

『あらさうですか。ほんたうだ、このきれにはエム、エチと縫つてありますよ。村上於花さんのでしようか。アラいやだ於母さん御覽なさいよ、こゝにこんなきれがありますよ。木綿ちゞみの浴衣地がサア、誰がくだすつたのだらう。餘り外のと不釣合ですねー。』

『ソレカエ、可愛想にそんなに笑ふもんぢやないよ。それは小使さんの娘が呉れたんだとサ、目に涙を一杯ためて「キット忘れないで頂戴ッて」、澄の袂に入れたのだつて、澄はそのきれを、大そう大事がつてゐたつけよ。あの子は、どう云ふもんだかみンなに好かれて、學校を出る時なんぞは、どんなに惜しがられた事だか。その小ぎれを縫ひ合せて蒲團にするつて云つて居たが、少しは初めてあるだらう。』

『アゝほんに於母さん、これをかうやつて置くのは殘念ですね、私が一つ勇氣を出して造へ上て見ましようか。折角の皆樣の御親切と姉さんのお心懸けとが無駄になつては殘念ですものねー。』

『さうだともサ、於前のためにも好い仕事だ、それを造へ上げ樣とには於前のいつもの傳では駄目ですよ、いまつでも我慢して忍耐してしなければ、とても出來ませんよ。姉さんがあんなに我慢づよかつたのも、始めつからあゝぢやなかつたの

だか、自分で制して制してお丶なつたのだから、えらいやね、その長い箱は何だね。》

《簪箱ですよ、アラ勿躰ない事、御母さん、こんな立派な櫛と簪、真二つに割れて居ますよ、どうしたのでしようね。》

《チヤそんなものがまだあつたかえ。見るばかりでも涙の種だ。思ひ出せば丁度あれが十五の春だつけ、あの時分の事を思ふと、ほんとにからだが寒くなるよ。おとつさんが今でこそあんな優しいおとつさんだけれど、おわかい時分には、ほんとに短氣で、平生はまだしも御酒でも上ると、實にどうにも斯うにもならないで、家中をほんとに、泣かせなすつたよ。それに一郎が中學を終つた頃で、どうしても大學へは入りたいと云ふ、おとつさんは入れぬと云ふ、寄ればさはれば、理屈口論、お前はまだ何んにもわからずだゞばつかり云つてるし、御母さんはそれやこれやで、病氣の絶えた事はなしお澄が一人で、御父さんの機嫌を取るやら兄さんをなだめるやら、子守やら、看病やら、ほんとに瘦せて青くなつてしまつたが無理もなかつたのサ。》

《そして御母さん、この櫛とかんざしは。》

《それかえ、それはあの子が十五の時サ、丁度今頃だつたら う、御とッさんが御花見に入らつして、其歸りに銀坐で買つてゐらつしつたのよ。お澄が大へん嬉しがつて、さしたり、しまつたり大機嫌で居たところへ、一郎か來たのさ。よせばいゝのにまたはじめたんだらうぢやないか。さうするとお澄が傍から「ほんとに御父さん、兄さんがあんなに行きたがんなさるから、やつて上て頂戴な。私や着物も簪も買つて下さらなくつても我慢しますから。」と云つたのさ。スルトお父さんが御怒りなさるまいものか「手前までが、そんな事を云ふ、いらないものならやりません。」ツて、その簪と櫛をね、庭の飛石へ叩き付けなすつたのだもの、堪りはしないやね、見る〳〵そんなに割れて仕舞つたのサ。》

《惜しうござりましたね―、それから姉さんはどうしたの。》

《姉さんかえ、姉さんはね、悪い事を申しました堪辨して下さいつて、泣き〳〵それを拾つてね、どうしちまつたかと思つて居たら、まだそんなに大事に、仕舞つてあつたのだね。》

《それから於母さん、兄さんはどうして、學校に行かれる樣になつたのです。》

《サアそれが、どうしてだつたか、今でも私は知らないのサ。澄が一郎に、此事は私に任して下さい、あなたはモウ一言も云はないで、と頼んださうたが、その後ある晩の事だつけ、澄が於とつさんの御腰をさすつてゐたつけが、嬉しさうにとんで來て「兄さん、お父さんが、大學に行つてもい丶つて、」と云ふんだもの、みな呆れて仕舞たのよ。一郎が大よろこびで、於父さんに御禮にいつたら「己に禮を云ふ事あない澄に云ひな」と、おつしやつたつてサア。》

《あんな優しい於とつさんが、そんなに、恐かつたとは、どうしても思へませんね、うちの於とつさん位好いおとつさんは、めつたにないつて、みな云つておいでゝすよ。》

《ほんとにさうだねー。もと〳〵性質の好いお方なのだもの、それに澄が、おとつさんに對して奇妙に力があつて、何でも澄の云ふ事には、お從ひなさらないで云ふ事はなかつたが、それと云ふもあの子があんなに孝行だつたからだらうよ。》

《於母さん寫眞がこんなにありますよ、これは長尾さんが獨逸からよこした寫眞ですねー、來月頃は於歸りになりましようねー。》

《可愛想だねー、長尾さんはどんなにびつくりなさるだらう。もうぢきお歸りと云ふ事だから、まだ何とも知らせないであるけれど、今になつては歸らぬ愚痴だが、去年歸ると仰やつた時、お歸りなさいと一言云つて上たなら、こんな悲しい別れにならなかつたらうに、澄がどんな立派な奧さんになつたであらうに、丸髷はあの子にどんなにか似付たらうねー。ア丶云ふまいと思つても、あきらめても出るものは愚痴はかりだ。「折角外國へ行つた序米國ばかりぢや殘念だから、も一年ヨーロッパを見て入らつしやい」つてかいてやるんだもの、いくら學問が出來上つたつて自分で死んぢや、何の甲斐もないぢやないか。ア丶然しこれも愚痴サ、よく〳〵考へて見りや何もかも天命だ。あの子の爲めに家もこんなに善くなるし、長尾さんも勇氣を落さずに、立派な學者になりなすつたさうだし、澄に取つては滿足だらうよ。死んだとは云ふもの丶見るもの、聞くものに付け、思ひ起すはあの子の事ばつかり、こんなものを見て居ても、あの子が口をきいてる樣な心持がする、死んだとは思へない、形は消えても生きてゐるには違ひないもの、その筈さ。》

《ほんとにさうですねー御母さん、私や姉さんに叱られて居る様な氣がしますわ、アラ御母さん、こんな人形がありますよ。鼻が欠けてゐるの、面白い人形だ、こんなものがどうして大事だつたのでしよう。》

《ほんとだねー、マアをかしな子ぢやないか、そんなものまで大事がつて、そりや叔母さんにもらつたのだよ、サウ〳〵その人形に付ては面白い話しがあつたつけ。チヨツクラ待つておくれ、焦る様な香がするから、臺所へ行つて見ねばなるまい。》

片々録（三）

如雲

◎五月蠅きものを引付けんとて砂糖を盛り置き、之に寄りたからせて、扨て別にゆるりと馳走するは經驗ある料理なり。大事を決裁するもの亦斯の如し。殊更に問題を呈出して、八釜しやを之にたからせ置き、是非の討論喧ましき中に、他の大事を決行す。然るに今人之を知らざるのみならず。後人も亦た之によりて歷史論を爲す、其の誤まらざるは稀なり。或る會席料理に上りたる熊公八公は、かの蠅よけの砂糖を水瓜にふりかけたるを見て、賞美せんとせり。英雄が蠅よけに呈出せし議案に騒ぐも亦た此類ならめ。

随感

花の春の辞

萠え出る草を踏み、麗らけき青雲を戴き、新緑のこなた彼方に春の花を觀れば、身も亦た欣舞して其の悦びに入らまく欲するなり。左れば此時に當りて人の謳歌せざるは稀なるべし。駘蕩たる心地よさに身の締りもゆるめ、天地を樂世と視做して何等の心配をするともなし。菜の花の黄ばみ、胡蝶の戯むるる、桃花、櫻花の咲き香ふなど、すべて氣色を爽快にするものならぬはなし。人生に六かしきことなどのあらんとは暫らく考の外にて、凡そ掛念憂慮するほど馬鹿らしきことは無しと思はるるなるべし。此時に際して嚴冬の壯烈を臆起し、茲に於て、秋風久しからずして到り、木枯しの寂寞に堪へず、刻苦忍耐の味ひあるとに念及するものは餘り多かるまじ。直ちに榮華の短きとを痛まんとするとの遠からずして大に増加すべし。四時速かに巡環し、人生は所詮走馬燈に似

たらん哉、人の成す所畢竟奈何。

凡そ春に樂しまんとするものは、冬に蓄ふる所なかる可からず。一日の休安は、六日の困勉より結果することを知り、人事の因果極めて嚴重なることを覺悟せざるものは、遂に其の樂しみをすら能く樂しむこと能はざるなり。歳々花開きて雲朶爛熳の香りを薫ずれども、妙に觀遊の暇を供へて恰好の愉樂を味はふものは極めて少なし。年々、花を慕ふて、而も花に反むくもの多きを見よ。人間よく勉めて而して優に其の樂しみに備ふるもの、至つて乏しきことを知らずや。

幽靈を如何んせん

幽靈といふものに驚かされ易き癖として、人の敎育上に此の迷想を除却せんと思ひ立ちしこともありき。春の宵、秋の夕ぐれ、ひとり打しめりて默想すれば、あやしき姿の髣髴として眼前に去來するあり。半夜、途上に徐歩して前後にゆき通ふ人絶し、天風、襟元に吹下し、枯草ざわだちて吾を追ふ心地のするころ、靜かに瞑目して想を起せば、新しき卒塔婆のかげに白き提灯のしよんぼりと立ちて、さめ〴〵として小雨の降る景色現はれ、何となう人影の立ちつゝ泣く姿など念ひ出さる。後には、此等の光景を一の樂しみとなし、わざと、さびし氣の墓場に獨り逍遙し、もしくは夜半靜かに空想して、彼の凄愴たる鬼氣と相接はらんことを嗜しむには至りつれど、當初年少の感覺に刻まれつる恐怖のこゝろは容易すく去りがたく、今にして尙ほ意はず悚然たること多し。但だ此の悚然たる所ろに一の趣味を感じて、今は寧ろ美の想とは爲せど、回顧して以て一般の人に施しがたきを知り、就中、吾家の幼き見等には、再び斯る經驗に苦しましめじと思ひ立ち、かつて多少の工夫をば凝らしけり。

左れば、幼き兒等に幽靈の話を語らしめず、偶たま其の書を見出づることありとも、言ひまぎらして餘所事に轉化し、可成在來の恐怖心を起さしめじと工夫せしこともあれど、此はまた無益にてありき、一つには遺傳にもよるべし。二つには何處かにて友侶より聞込むなるべし、何時の間にか幽靈と云ふもののあることを信じ、其の恐ろしきものたることをも知り、時としては、小兒に似合はぬ悧巧氣の言語を發して、氣味わろ

しなど言ふとのあるに至れり。
余、つく〴〵と思ひけるは、幽靈を感ずることと寧ろ人の本性ならめ。太古、物の影を見て無形の靈あるとを知り初めしてふ一説の當否は知らず。人はさま〴〵の機會に於て物外の靈あるとを感知し、たゞ見ゆる限りのものに止まるべしとは思はざりしなるべし。或は風の響に驚ろき、或は波の音に怖れ、雷にふるひ、電にめくるめき、何となう一種幽靈の氣の沈深として出沒する氣色を覺りけらし。乃ち是れ人、幽靈を信ずるの根元なり。
但だ夫れ、怨恨の亡靈を畫くと行はれ、怪談奇話に、怨みの魂魄のさまよふとを甚だしく言ひ觸らせしより、幽靈を感知する人の本性に、一の道を添へて、幽靈とは即ち怨恨の鬼に限るものの樣に思ひ做すに至りしこそ殘念なれ。幽靈の感覺は去りがたし、其の姿は一新するとを得べし。余は今にして幽靈觀の改良に志あるものなり。
翻つて西洋の幽靈を考ふるに、彼は必らずしも恨めし氣のものに限らず、至つて樂しげなる、又は福々し氣なるも多くある也。第一、天の使と云ふは、其の幽靈として觀ずるものの第一なり。左れば、歌舞演劇に現はるる人の亡魂にも、最と樂し氣なる、甚だ可愛らしきなどあり。吾國にて直ちに測想せらるる白眼亂髮の悽然たる者とは趣を異にせり。これ實に羨ましき想像にてある也。
幽靈も亦た人の如きものゆゑ、之に善なるあり、惡なるあり、凄きもあり、愉快なるもありとして、小兒に語らば、其の本來の想像に恰當して、自から穩健なる感覺を得べし。彼等の幽靈を聞くや制めがたし。但だ之を改善轉化するは即ち易々たらんのみ。
左れど此は小兒の爲にのみ言ふべきにあらず。國民幽界を念ふの想を普く一變し、其の靈觀を快くして、無形の天地を積極的に化するが爲めには、少なからぬ影響あるべし。凡そ民情風俗を改むるの根柢は、大抵、此邊の所よりして手を下すをもて效力ありとす。
之が爲めには、文士、美術者等の新たなる經營を所望す。

女ざし押してのぼるや山櫻

雜録

經驗は事物の境を越えざることあり

曲浦子

大和の老農、故中村直三氏が大和に於て經驗したる、稲作改良の法をば、直ちに秋田縣に施して、季候風土の差異を計らざりしが爲めに、計策悉く失敗を招き、辛勞全く徒爲に屬したりとの事は、曾て略述せしが、また爰にそれによく似寄りたる一話あり、養蠶秘錄に見えたり。

其話といふは、昔寛文年中の頃、但馬國城崎郡小島村といへる處に、八十有餘の老女ありしが、此老婆は、不思議にも空の雲氣を見て、風雨を考ふるに頗る妙を得たりしかば、其近郷の農夫或は漁夫、船乗など、日夜來りて晴雨を問ふに、一として明中せざることとなし。されば、また近里の蠶業家等も、來りて、一年の養蠶の吉凶を問ふに、天氣の工合を豫知して、其年に於ける早晩の蠶の利害を豫言するに、果して違ふことなかりしかば、たゞ〳〵不思議奇妙の老婆よと、近郷の人々、驚きあへりき。然る處或時大坂堂島の米相場師某、城崎の温泉に湯治に來りて、此奇異なる老婆の噂を聞きて、奇貨おくべし、我其老婆を伴ひ歸りて、毎日天氣を見させて、米相場をなさば大利を得んこと、鏡に懸けて見るが如しと、未來の大富豪を豫想して、獨り自ら大に喜びつゝ、彼の老婆をば召し抱へ、早駕籠にて大坂に連れ歸りて、別宅に住まはせ、美衣美食を供し、人には深く秘して之を語らず、日々夜々晴雨を問ふて、相場をなしけるに、こは又訝かし、老婆の言、一として中らず、彼人は案に違ひて、大なる損耗を招きしかば、甚しく怒り、老婆を詰責して、其方天氣を豫知するに妙を得たりといふによりて、多くの金錢を吝まず、此地まで連れ來り、大事にかけて養ひ措くに、何故に、我をして莫大の損をなさしめしや、何が不足か、但し詐僞いつはりかといひしに、老婆の答へていふ樣、決して不足があり、また虚言をいふにてはなし。當國は我故郷の但馬とちがひて、海邊に近き高山なし、夫故に樣々心掛け見れども、兎角知り難きなりといひしとぞ。

また昔西方の或國にて、養蠶は利益あるものといふにより
て、其所の地頭某、領内の百姓に命じて蠶桑の事を勉め
しめしが、此道のしるべにとて、農夫等東國より一書を得て、
之に倣ひて、年々養蠶せしに、いつとても不作のみにて、莫
大の損をなしたり。さるによりて、此地は養蠶には不適當な
るならん、中止するに如かずとして、折角生ひ立ちし桑樹を
も切り拂はんとしたる時、人ありて、季候風土を異にしたる
此西國に在りて、悉く東國の通りにて養蠶せんとするが故
に、年々の不作となれり、よく此土地の氣候の鹽梅を考へて、
しか〳〵になさば、必ず良作あるべし、今一年、方法を改め
て養蠶をなすべしといふに、其言に從ひて試みしに、果して
良好の結果を得たり。それより、遂に此地方は、今日までも
永く養蠶流行の地となりたりといふ。

夫れ經驗なるものは、一事一郷の境を出でざることあり。前
に出せる二談の如きもの、よく其然るを證す。悉く人の説
を信じ、悉く人の書を信じ、悉く人の經驗を信ずれば、
遂に甚しき損耗を來さん。此等のもの素より重んずべし、
たゞよく之を吟味、咀嚼し、時に應じ、物に應じ、處に應じ
て、流用應化するによりて、其效能を示し來るなり。江南の
橘、之を江北に栽うれば、枳となると、形あるものに於て
すら然り、況んや人智無形の經驗に於てをや。されば又泰西
の文化智識制度を直譯し來りて、直に我國に移さんとする
に當りて、時に彼大坂の相撲師たり、某郷の農夫たるの覆轍
に陷らざるを得んや。

内外、人情に於て異なる所あり、其多少の差異は、文物風習
の上に顯はれては、莫大の差たることあり。然るに我れの人
情を以て、強て彼の文物風習を解せんとするときは、頗る誤
謬なきこと能はず、而も亦之を以て直ちに我の人情に加へん
とするに於てや、枘鑿相合せざるものあるなり。彼の我に於
けるも亦然り。然るに此際の事情を察せずして、我を以て彼
を責むるの徒は、彼偏狹の國家論者となり、また、彼を以て
直に我に加へんとしたるの失蹟は、歷々として既往歐化主義
流行時代に在り。否啻に既往といはず、今日の政事家、教育
家、學者にして、よく泰西を直譯するの迷妄に遠ざかり得た
るものも、なほ甚だ稀れなり。

人力車夫

一車夫記

下等勞役者中に於て最も勝手氣儘なる生活をなすもの人力車夫を以て第一とす。恐らく彼等は他の勞働者中の最も上級に位するものにして日雇人足に比して優ること數段とも云ふべきか。彼等の先づ就業せんとするや、其管轄區の警察署より免許證を得ざるべからず。免許證を得んと欲する時は、一定の住所を選び、其籍を有し居る證明を區役所より取り警察署に出し、かつ其被服所有品の撿査を經るを要す。被服と云ふは黑の筒袖衣或は黑の法被黑の腹掛股引等にして所有品とは提灯、笠或は帽子（帽子は俗に云ふ大黑形に限る）雨合羽等にして、以上の品々は新調のものにあらざるも破綻の點なく汚目の見へざるをよしとす。夏日は六月より十月までは、白地筒袖白半股引にて事足れり。もし破綻し毀損せるか又餘りに古びたるかの衣服物品等を出す時は免許證を與へられず。又た別に車躰檢査ありて、其所有せる車の古びたると、汚穢なると、又た損所あると定規の製造法に反する點ある等の事あれば、其車躰に附する車躰檢査證を下渡されず、免許證車躰檢査證なくんば就業するを得ず。故に狡猾なる輩は一時他より其衣服所有品等檢査に差支ざるものを借り來り、警察署に趣き滯りなく檢査を經るもの多し。車躰檢査も同樣の手段を施すもの決して珍らしからず、然れども平日時として臨時に取調を行はれ、街頭不意に檢査せらるゝ事も少からざれば、皆其服裝は定規に反かざるやう注意し居れり。そは服裝車躰の奇麗なると否とは唯に檢査に關する一事あるのみならず、各自の營業上に拘からざる關係を有すれば也。十年前の人力車夫と今日のとを比較せば乞食車と抱車との差異あるべきは勿論、總じて毀れかゝりて塗りのはげし台箱に折れかゝりたる梶棒桐油木綿幌の不恰好なる車に腰の曲りたるよぼ／＼老爺が古びたる單物の裾を僅にからげ、車上の客をして冷汗を流さしむる等の不躰裁は今全く其跡を絶てり。押手附、小金紋、上漆、眞堅の黑塗箱、金物は赤銅の澁味、米利堅すかし、幌にはニッケルの幌張象鼻籐卷きの梶棒等よりわな天鈿止めの中張り蒲團、彈機の拵へ、すべてに意匠をこらせし車臺に、伴ふ車夫は頭より足の先まで紺氣新しくまだ香のある法被、股引スコッチの前掛を腰に卷きて、蹴込に敷て眞紅の綿羊皮

の上に腰かけたるが、舶來煙草のピンヘッドかパイレートを燻し居る樣、十年前には確に奏任一等の官員樣が抱の車夫、それが今では行く所に多く、客の方で遠慮する位、併し中にはガタ／＼車にヨボ／＼車夫のなきにあらずと雖も、總じて車躰服裝の美なるもの程、多額の所得あれば、彼等成べく此點に注意せり。

免許證を得て先づ街頭各所に設けられたる停車場に趣きて往來の客に、さて乘車を勸めんとするも『旦那參りますか』のかけ聲なか／＼甘くは喉より出ず、漸く一人載せて走り出す時、二三町は未だし四五町も來りしと思ふ頃より、呼吸烈しく胸部の皷動次第に高く、額の邊に汗にじみ出でゝ足も重氣になれば、呼吸を少しく靜めんと緩く歩むうちにも、車上の客はさぞ怠け車夫と思ふならん、などゝ案じ、十間程行く後より勢よく走り來る一臺、聲をもかけず我を走り越したるに、未だ氣息も心臟も靜らざるに再び走り出せば、此度は二町も行じと思に、最早肺も心臟も破れやせん。足には千斤の鼎にても穿しなるかの樣に思はれ、打倒れん計なるに、今は是非なくまた歩み、それよりのちは二十間走りては十間歩み、十間歩みては二十間走り、全身汗にて水をあびたる如く、その苦しさなか／＼に筆もて書き出得べきにあらず。最初三四回はさのみ遠き道ならぬも、挽まはれば身躰綿の如く、疲れ果てゝ如何ともすべからず。かくて三四日を經、一週間を過し、漸く氣息も平かに足も重きを覺えずなり、半月にして少しく遠距離を行も堪得べく、一月にして身躰全く人力車夫たるを得るなり。

されど此期の辛棒大抵の事にはあらず。二日勉めて一日休息すれば、忽ち元の身躰となり、十日の習練も三日の骨休めによりて、氣息切れ動氣は最初に異らず。後戻りの速なる實に驚く計なり。多の人は三月程を經過して膝脚氣とか云ふものを惱み、膝の關節に恰もルーマチスの如き疼痛を覺え、屈伸に困難を感ずるも、こは人力車夫の上に臨む一の試驗とも云ふべく、其痛を堪苦を忍で一層出精するものは、足力大に加はり其疼痛も自然に去り、耐忍する能はずして其業を止め治療などに日を送るものには、一度治するも久しからずして、前同樣の疾病を來たすべし。

最初は唯だ其賃銀の高低を問はず、客あれば挽くの有樣にて、

所謂數でこなすが故に新參者の割合には得る所の金額多しと雖も、次第に慣れ來るに從て、其心に客の貴賤貧富を選擇するの心を生じ、また其行く可き場所の善悪賃銀の多寡を論じ、なるべく利多くして、勞少なき仕事を得んと欲し、客あるもなか〱に動かずなりて、却て大に得べきものを大に失ふの愚を見るもの多し。普通の日雇人足の如きは、終日齷齪として十時間乃至十二時間の業に就て得る所の勞銀、僅かに二十五錢より四五十錢を限とす。然るに人力車夫に至ては僅々二三時間にして、七十錢の金を得るものもあり、一時間三十錢を得る、また珍しからず。然れば車夫の如く金錢を浪費するものはあらず。彼等は今其有する所の金を盡して費すも、一度客を得れば三四十錢の金を得るの望あり、然らざるも一宿一飯の資の如きは最も容易に得べければなり。普通の車夫にして一日平均四五十錢月に十二圓乃至十五圓を得、少しく精勵なるものは、裕に一日六十錢乃至七十錢を得るものあり。故に彼等の或者は遙に區役所の官吏月給七八圓を得ものに勝り、彼等を叱りつくる警官の俸給に倍する者あるを常とす。』

車夫は其車を有するものと然らざるものとあり。車を有せざ

るものは貸車を業とする者の家に就て免許證に添へある切符を渡し、車を借り入れこれに相當の齒代(破代か)即損料を拂ひ、然らざれば挽取代價を辨ずるなり。挽取代價とは日々齒代と共に、十錢乃至二十錢の金を車の所有主に渡し、到底は其車を我が所有にせんとする、所謂日賦辨金にして、一年或は數月後引取るべき契約によりて、日々入金するものなり。齒代は四錢以上七八錢迄新古によりて相違あり。毛布提灯法被股引に至るまでも、相當の損料を出す時は借り入るゝを得べし。また各區に必ず一の組合ありて、車夫たるもの必ず其組合に加盟し、組合鑑札を受けざるべからず。

車夫は各區の位地名稱各町の位地道筋の遠近神社佛閣公園諸官省銀行會社有名なる商店旅人宿割烹店等の名稱位地を詳知するを要す。また車夫相互の間に於て用ふべく、行ふべき種々の符諜及び心得を知るを要す。亦私設停車場、公設停車場ありて、私設の方は七八人共同して設けたるものなれば、決して他の車を假かしめず。客を得れば定められし順番によりて行く、此邊にてたとへ他の車夫が客を得るも、番のものに見止めらるゝ時は、其客を乘する能はざるのみか、番の妨

をなせりなどゝて大爭論となることもあり。公設の方は後者先きに停車し居るもの、次に車を置き、客を得たる時も一應挨拶するのみにて足れり。彼此仝時に客に聲をかくる時は、聲をかけしものだけにて鬮引を爲すなり。道にて後車前車を追越さんとする時は、一言斷るべき筈なるも、然せざる時は此に競走となり、時に喧嘩ともなるべく、後車前車の跡に從ひ行く時は、前後の距離一間を隔つること、兩車相遇ふ時は互に左方へ避くることなど其他種々の定めもあり。其用ゐる符諜の如き、大方は左の如し。

オツ(一錢)、ナメ(二錢)、ヤミ(三錢)、ダリ(四錢)、ゲンタク(五錢)、ロンジ(六錢)、セイナン(七錢)、バンド(八錢)、キワ(九錢)、ドテ(十錢)、ドテジメ(十二錢)、ドテゲン(十五錢)、キンゴ(十五錢)、フリカン(二十錢)、ヤリ(廿五錢)、ヤミロン(三十錢)、オトヤリ(壹圓)、バテル(疲れる)、ヨナ(夜業)、ハナをきろ(先に行く)、ツブ(一人)、コブ付(小兒を伴ふ客)、タ子(客)、オトダ子(よき客)、相箱(二人乘)ウタヒコミ(客の方より乘車せんと云ふもの)、オカン(徹夜)、ツレモノ(二台以上共に行くこと)、モウロウ又はシボル(客を求めんとぶら〳〵車を挽きつゝ歩みまはること)、マワス(挽く)、カフル(芝居のハ子)、ヤナギ(緩りと走る)、アセル(大いそぎのこと)、カンバン(提灯)、テラシ(蠟燭)ヌク(追ひ越す)、

其外なほあるべし。二人乘は力強く達者なる年若のものが挽くものらしけれど、其實却て年寄れるものか、弱きもの、走れぬものかの挽くに定まりたる如くなるも奇なり。そは少しく力を要するも徐々緩かに走りて、別に客も氣に止めざれば壹人乘を挽くに比較ぶれば、遙かに其勞尠く又至て樂なればなり。夏は瀧なす汗に全身絞る計り、時折目に流れ込みて堪へがたきも拭ふ暇もなきことあり、燒くが如き日光に射らるゝ身の苦しみ大方ならず。足の裏面は、街頭にまかるゝ水を蹈みては熱砂の上を行く事とて、さすがの厚き皮も剝脫することあり。然れども一仕事せし後樹陰に凉風を浴びて、汗押拭ひつゝ氣息を安むる時の爽快なか〳〵に云ふべくもあらず。然れど嚴冬の候、寒氣骨に徹し、肉を裂き、血を凍らす如き心地のせらるゝ折霜白き巷に客を待つ時の苦み、これも亦堪へ得べきにあらず。されど一度客を得て挽き出す時は、躰温漸く增加し來り、遂には全身より煙立ち登る計り、汗も流れて身は寒氣中にある感更になし。されば夏日は停車中に樂なるも疾走中に苦しく、冬期は疾走中樂にして停車中苦し。然れども車夫は停車の時間疾走時間よりもながきが故に、夏期

を優れりと云ふものあり。併し兩期共に優劣なく、唯だ車夫の健康に夏冬の氣候の少なからざる損害を與ふるは事實なり。

古事斷片

長汀

◎澤庵漬は江戸品川東海寺の澤庵和尚なるもの、初めて漬け出したるが故に、其名ありといふは、一般に信ぜらるゝの説なれども、また一説には、澤庵和尚の墓所、同寺境内に在り、其形無縫塔とて、丸き石を置くのみなり。大根漬の壓に丸き石を置きたるさま、澤庵和尚の墓所に似かよひたるが故に、俗に澤庵漬の名あるなりといへり。後説或は眞に近からん乎。」

◎今鴫燒といふは、茄子を輪切になし、串にさし胡麻の油を塗り、味をつけたる味噌をつけ燒きたるものをいふなれど、元禄茄子の中をくりて、しぎの肉をつくりて入れて料理したる鴫壺燒といふものゝ變化したるなり。

◎田樂豆腐といふは、田樂の曲に鷺足とて、竹馬の如きものを、一本立て乘ることあり、その形に似たるが故に名づく。むかしは、豆腐を丸く切りて、今の茄子のしぎ燒のさまなりしが、後には四角に切りたる儘、串にさして、爐中の灰に立て置てあぶり燒きたるなりと。今に至りては、其形、其燒方また變れり。

◎田樂といふは、田畑の豐饒を祈る樂とも、また田植の時、農人の勞を慰めんための樂ともいひ、兎に角に雅樂にはあらず、鄙びたる樂なり。されど昔は多く貴人の間に弄ばれしなり。其樣は今の輕業、曲舞に似たり。太々神樂といふもの、蓋し田樂の餘流ならんか。

◎錢を鳥目といふは、一厘錢などの形丸く穴の四角なるは鵞といふ鳥の目の形に似たるよりなり。故に鵞目とも鵝眼ともいふ。支那の俗語に錢を孔方、または孔方兄といふも、穴の方なるが故なり。

◎今はむかし豫州松山の藩士に某とて、歌好む人ありけり。我家の格子戸の上に、

　のら犬が這入ろ〳〵としてならぬ
　　こゝをあけたらたてゝおかんせ

としるしたりとなん。

◎冷泉家代々の歌人の中にも傑出したる中納言爲村卿が、或

時無官大夫敦盛を、須磨の浦に二郎直實の、扇をあげて、其後を追ふかたの畫に讃して、

　　吹きたえぬうしろの山の風もうし
　　　須磨の若木の花のちりがた

とよめりしは、時の人にいみじく持て囃されしとぞ。

◎昔京都島原に、珊瑚といふ遊女ありき。其ものゝ歌に、

　　とそやたれたれかは今日の夫ならん
　　　定めなき世に定めなき身は

河竹の流の身の上、いとあはれなり。

◎難題の俳句に

　　謂二天高一踞
天高しさうでざつても百合の花　千翁

　　謂二地廣一蹐
廣き地にあやまる足や田草取　貞佐

　　天時不レ如二地理一
　　地理不レ如二人和一
人の和はすぐなり竹の若盛り　沾涼

史傳

櫻のかげ懷古

山下石翁

　ふかくさの野邊の櫻し心あらば
　　ことしはかりは墨染にさけ　上野岑雄

　記得花開雪滿枝　和風和蝶帶花移
　只今花落遊蜂去　空作主人惆悵詩　于武陵

◎敷島の大和心を人問はば、朝日に匂ふ山櫻花とは、我が同胞の氣稟を代言せると共に、更めて其の理想となれり。就中、八重、千葉にはあらぬ、單重こそ、取わけて其の趣味を十分に發揮するものなれ、淡裝にして潔く、散つて片々として面白く翩舞する狀態など、他にはあるまじき姿なり。牡丹の濃厚なる、薔薇の艷麗なる、梅菊のあまりに親みなき、何れも大和心の好美を形すとは言ひがたし。

◎能因、西行、兼好、小町などの此花を酷愛せしは左もありなん。義家が勿來關に、馬上鎧の袖に振かゝる葩に忍び、鬼將軍清正が、名護屋の築城に櫻樹のかげに歌うたひ、辨慶が一

指を切らるゝほどに恨み、楠家の臣隅屋、樹の下を去らじとて打死せしなど、如何の風流ぞ。古の武士は優しきものにてありけり。

◎東京向島隅田河の堤は十六里ありて熊谷宿にいたる、天正二年小田原北條家の築きたるものと云ふ。然るに、享保の頃三圍のあたりより木母寺まで、堤の左右に櫻柳を植たり。此は、德川氏治水の例法にて、樹の根をもて土堤を固むると云ふが一つの主意なるべけれど、殊に櫻を用しは、年々の櫻の見物に多數の人に蹈み固めさすと云ふも亦た一つの秘訣なりしならめ。德川の末葉には、之を伐りて他の有益なる木を植ゑんなど言ひしものもありしよしなるが、固より志ある人によりて止められたり。

◎櫻は又た水を清くするとの言ひ傳へありて、水ぎはに植るは此の一つの德より思ひ立たれしもあるべし。今の東京の愛宕下に櫻川町と云ふがあり。之は元と虎の門のほとりより愛宕山のあたり迄で悉く田畑にて畔にあまたの櫻樹ありしが、小川其間を流れしかば櫻川と名づけたりと傳ふ。此の小川に櫻を植ゑしも亦た此の主意なりけり。小金井の長堤、万樹の櫻も亦た此の主意によるらめ。

◎吾朝、櫻花を賞するは履中帝の時より始まる、稚櫻の宮は大和にあり、故に大和の地、櫻をもて聞ゆるもの多し。嵐山は、龜山帝の時、吉野より移し植らる。藤原秀衡、櫻樹を駢植する三十里、之を陸奥吉野と云ふ。宗尊親王、吉野の櫻を上總に移し、吉野鄕と曰ふ。江戸飛鳥山を新吉野と云ふ。東叡山の花は吉野より移す。小金井は常陸櫻川の種と吉野の種とを用ふ。若狹青羽山に晩櫻あり筑前竈門山に火櫻あり、日光山に紅櫻あり。伊豫に墨染櫻、十六日櫻あり。

◎西行の歌に、

願くは花のもとにて春死なん、
そのきさらぎのもちづきの比

後果して二月十五日をもて沒す。吉田兼好、晩年に葬地を雙岡に卜し、櫻を植ゑ、歌ひて曰く、

ちぎりおく、花とならびの岡の邊に
あはれいくよの春をすぐさん

◎大和國宇陀郡佐倉村に櫻實神社あり、上古、天より櫻實を雨らし大八洲に徧かりしと、後世、こゝに木花開耶姫を祀る。其他、伊勢度會郡の朝熊神社、多氣郡の宇爾櫻神社、朝明郡の

櫻神社、伊賀國伊賀郡の田守神社、近江國伊香郡の櫻市神社、櫻椅神社、駿河富士淺間神社、佐渡の後神社、等皆な開耶姫を祭る。櫻の神は即ち女神なり。

◎後醍醐天皇、亂を吉野山に避け玉ふとき、一日、花を觀て左右に謂て曰く、朕昔し此花を詠ぜしとき此山を見ず、朕今ま此山に在りといへど、此花、朕を奈何せんと。左右悲泣す。

◎新待賢門院吉野にありて、落花を聚め山となし、呼んで曰く、あらし山と。

◎廻國雜記に、白河二所の關にいたりければ、いく木ともなく、山櫻咲みちて、心も詞もおよび侍らず、云々「志ら川の關のなみ木の山櫻、花にゆるすな風のかよひぢ」、など路邊の並木のものに見えたるも少なからず。

◎西京皇居の南殿の櫻は、俗に左近の櫻と云ひ、右近の橘に對す。南殿とは紫宸殿の事なり、櫻は紫宸殿の巽の角にあり大內草創の時の樹なるよし、花は單なり。一説に、もと梅なりしを承和年中に枯れければ、櫻に改ためさせられしは、仁明帝の時より也ともいへり。

問答

感情深き子供の教え方につきて問ふ

田舍の一女子

拜啓扨て私は女學雜誌愛讀者の一人にて御座候此度紙上に於て御教訓を仰ぎ度事御座候て申上候さて私妹に未だ六歲にも滿たざる少女御座候が性至つて感情深く三歲の時にて兄弟及び友達と共に群れ集つて錦繪を眺め居り候に私は解釋を賴まれて說きあかし參り彼の石童丸が獨り山中を步む圖に至り候て簡短に其由をはなし候時に少女竊かに淚を落し居るを私はそれとも悟らず如何したるかを問ひしにむせび泣して申樣「かあちやんが死んで仕舞つて獨で步くのは可哀想だ」とて止め申さずよりて私は急ぎ後に直ぐ父に遇ひたる事を告げて慰め申候夫より今に至るまで彼樣のあまた御座候ひし由なれど私は暫く離居致し居て存じ申さず候ひしが近頃少女が姉修業の爲上京し彼地にて寫したりとて寫眞を送り越され候より

て此少女にも見せ申候處つく〴〵と眺め居候ひしがやがて下向きたる儘涙を落し始め候誰れもこは姉を思ひ出でたるなりと思ひて言葉をかけざりしが後にはむせび聲の聞ゆる樣になり候程に傍の一人其譯を尋ね候に姉君一人にて遠き處にあり若し病氣になりし時はいかに困るならん故悲しきなりと答へ申候之を聞きて此子は幼き時よりあはれがりしが今にまだ其感情つよし度々餘り感じ過し候は宜しからずと存じ候夫れに此子至つて身躰の發達よく年に似合はぬ程生長致し候により父母の考にて學齡にて學校に送らばあまり大き過ぎて見ぐるしかるべしとて滿五歳の時入學致させ候に學を好みて常に友達の見えぬ時は獨り机により讀みたり書いたり樂しげに見え申候斯樣の年齡にて斯樣の事さするは感情深き子にとりては猶更よろしからず後には身躰にも障る事あらざらんかと存じ強ひて讀書をさせぬ樣哀れなるはなしを聞かせぬ樣と存じ此子にあてゝ姉より片假名にて書きし手紙も御座候へ共見せ申さず置き候されば常に猛き談にても聞かせ候てはとも存じ候へ共少女は大に強き處御座候て時々は兄も困らせらるゝ事御座候左樣の時は充分に云ひ聞かせて兄を兄とも敬愛する事

を敎へ居候へ共いかゞ致し候はゞ宜しく御座候はん此子敎育の方法につき御敎示戴く榮を得候はゞ上なき幸と存候。

答

あまりに感情深きは身躰弱く、神經の過敏なるに由るもの多けれど、此の子は「身躰の發達よく、年に似合ぬほど生長せり」とあれば、先々此の方は掛念なしとするも、其の敎育には、生理心理の二つを偏廢せぬやう注意し、穩かに久しく保育せらるると肝要ならん。食物には可成く滋養品を用ゐ、刺戟品を減じ、運動、出ありきを多くし、皮膚を清潔にし、便通を正しくせしむる等に十分用心すべし。學問は成るべく晩き方にし、決して之を速かにせず、所謂る天才らしき誇りを決して所望すべからず。平生の扱ひ方に大切なるは、之れを獨り置かず、可成く會話せしむる工夫を爲し、常にお話しをして聞かすべし、左りとて、あまり、にぎやかにするは反つて悲しく思はする元なれば、只だ穩かに靜かに話しかけて、自然と哀を忘れさする樣になし、夜はもとより一處に臥する人を定め置くべし。第一の必要は、此子を熱愛し、又た此子が熱愛する人のあらんとなり。愛は、心をにぎやかにし、世

を樂しくする耳藥にて、厭世の種を殺すの力あるものに候へば、何よりも先づ之を欠ぐべからず。先づ大躰は以上述べたる外に申し様なけれど、身躰の事は素人考へにせず、折々は醫師に見せて異狀なきやを察し、心理の事は前述せし次第を試み玉ひて後、又々其結果を示し玉へかし。

文藝

題詠題作

歌にも文章にも昔しは題を出して空に作ると云ふはなかりしとなり。後世に及んで盛んに此事あり、此事盛んにして亦た弊も出でたれど、抑も先人、題を撰みて作を工夫せし精神を洞察して、正しく其道を活用するの心掛なかる可からず。抑も、題に臨みて作するの覺悟は、心頭豐に其の想像を起こし、身を其處に寄せ、宛然實地に在るの心地して、風雅の懐を躍らせんとするにあり。正に是れ美心を用ふるの絶頂ならずや。凡そ人、好風景に臨んでは筆を投ずるの外あらず、文思激越の砌り直ちに其の想をもらすものは未だ曾てあらず、之れ是れ同情の盛んなる之に同化せられ、一身正に之と同躰となりて未だ作するの餘暇あらざるもの也。之より退くこと一歩、感の退くこと亦た一歩顧みて回想し、憶起して再感し、則ち以て口に筆に、吟詠ある也。左らば、題に臨みて能く作するものは、好風景を見て能く作するものと差異あることなし、同に共に想像に訴たへて美心を回起するの外なければ也。既に先づ題に臨むの此の工夫あり、此の道ありて、而して能く題作の才を活かすべし。今の切りに其の弊をのみ言ふものは、先づ此の緊要事を敎ふることをせざるに由來す。

○案山子廼舍諸社中詠草

池袋清風大人評點

、、故郷松　土佐　藤尾春江子

ふるさとのむかしの庭のひとつ松今は野みちのしるし也けり

評　今は野徑の標識となりて廣野に立てる一本の松も過し昔は此界限おしなへて人里にて此松も或家の庭松として植ゑられ千代かけて家の榮を契つらん無常の風は家人を誘ひ去り或は不時の厄難の侵す所一朝にして富貴の夢もさめ果て流離頓沛し漸く空屋と軒朽ち柱傾き棟落ちて遂には朽ちたる材木すら殘らぬ荒野となり變るも一本の松のみは昔ながらの緣深

く榮えたるを見ればむしろ草木の榮えるもはかなき人世を嘆して詠ぜしなるべし斯る感情は此愛すべき少女の心にも生ずることゝ老大人と異なるなしされば こそ古より青年少女の名歌を詠じたるなれそは人生れて既に十四五歳にもなれば老大人の經過したる普通の境遇事物に接し隨時の感情起る故此感情に基きて詠ずる時は古人も言ひ洩らしたる秀逸を出すもの也然るに哀しむべきは世の歌學者此感情には基かず題に臨めば先づ古歌の作例を其趣向を編み其辭を掠め全然古歌の綴ひ直しを排列して以て自詠とす詠者自らは然らずと言はん然れども如何にせん其詠自ら之を證するをや勿論三十一音の事なれば悉く古歌と異なれとはいはず趣向斬新なるか否れば全首中の一句にても我有たらざるべからず

、、思花　　信濃　米澤與十郎

おもひねの夢路はる〳〵わくるかな芳野の山のはなのしら雲

評　一種言ふべからざる幽美の感あり

、老後述懐　　丹波　北村縫子

たらちねの庭の訓もかもひ出てくやむ老ともなりにけるかな

評　庭訓は幼時の訓なれば下句老後と照應せり

、、寄柳戀　　備前　伊丹渡衞

うちとけてなびく姿もなかりけり思ひかけたる青やぎの糸

評　糸の縁辭を能く用ひて遺憾なし

、島朝霞　　京都　福田美禾子

さしのぼる朝日おぼろに匂ふかな霞みわたれる沖つしま山

評　長閑なる海上の春景述得て餘蘊なし

、、山春曙　　奈良　牧野信

初花はまださかねどもよし野山のどかに霞むはるの明ぼの

評　下句はありふれたる辭なれども上句にて大に力出たり大方の人動もすれば飾り過ぎて斯る所に滿開の花を持出さんとする也然るに詠者は却て未花をさかせずして餘情を示せりそは萬物全盛よりも初萌の時は中々奥ゆかしきもの也此所は漸く春温の候となりたれば讃て樂みて待つ花も近き内に咲くべし此儘花さかばいかに美しからんとの愉快なる望を起させたり春曙の歌に多し此歌亦善くよめり

、、柳蔭春雨　　京都女第五社の某

おぼろにも霞みこめたる青柳の陰ふむ道にはる雨ぞふる

評　春雨固有の性は空は陰りながらふるとも見えぬばかりの細雨烟の如く終日ふるもの也故に長閑にもあり寂しくもあり柳蔭、閑寂なとに雅趣適當す此所謂中靄然閨中若くは堤上の柳林淺綠なる中を逍遥すれは細雨霏々として一種の感生ぜり

時文

◎この花　　新詩會編　同文館版

新體詩の流行漸く盛んにして、新體詩集の出版、これより多からんとするに當り、『この花』先づ難波津ならぬ、この東の都に咲き出でぬ。咲くや『この花』の詩人八家、おの〳〵異彩殊香を放つて、妍を競ひ、芳を爭ふ。羽衣、桂月、雨江、直文、信綱、鳥山の流麗巧緻なるあり、鐵幹の豪宕なるあり、子規の才に過ぎたるあ

り。各篇いて誦すべきものあり。然れども『この花』吾人に示すに、文の巧妙なる、想の斬新らしかる、また剛さうなるものを以てして、未だ幽玄、壯大、高潔なる理想を歌ふものあるを見る能はず。『この花』は未だ吾人の詩心を滿足せしむる新体詩集に非らざるなり。

◎家庭要訓

下田歌子述　同文館

此書は下田歌子女史が華族女學校にて教鞭を執るの餘暇、家塾の女生若しくは、友人の息女などに講述せられたる、家政學の一斑なれば、新に上梓したるものにして、主婦の務、老人、小兒、親戚、朋友、婢僕、病人、金錢の取扱ひ方より、衣服、食物、住居、禮式、書信書物に就きての注意を說述しあれば、既に一家の主婦たり、またはこれより主婦たるべき女子の心得草さして、頗る適當なり。また女學校の家政科の教科書もしくは參考書さするによろし。

◎少年史譚 第貳編 阿新丸

中野三董子著　民友社版

後醍醐帝高時を御征伐あらせられんさせし、其大御心の起りし初めつかたの事々より說き起して、無禮講、企の露見、一味の張本資朝卿の佐渡に流されしが、其處にて失はれしを、其子阿新丸の、親御の仇さて本間の三郎を討ちし物語を簡短にかきあるしたるものなり。少年者輩の讀書によろし。

◎ふたごゝろ

春の屋主人譯　春陽堂版

春の屋主人が米人某の小說を義譯して、曾て某給入新聞に連載したるものさいふ、この『ふたごゝろ』の筋は、米國南北戰爭の砌り、南軍の大佐たりし、木暮利四郎さいふもの、戰爭の後、利慾の二字を楯について、義理も人情もそち除けにして、濡手に粟の金儲けを企て、樣々の惡事をなし、カリフホルニアにて英國の財產家平井且王なるものに首尾よく取込み、この者さ英國に渡らんさしたるに、途にて難に合ひ、彼は死したりさ思ひて、利四郎は、之を幸ひ其容貌の甚だ平井に似たるを奇貨さなして、英國の平井家に、僞息子さなりて入り込みたるが、樣々の大膽なる術計も、平井の妹に思ひの外の戀せしが爲に水の泡さなり、死せりさ思ひし眞の平井は生きかへり、己が義に棄てし妻にも見顯はされ、事遂に成らずして自殺したりさいふなり。木暮利四郎の性格は、豪膽無慈悲にして、また欺騙多き大奸物を顯はして中々に妙に入れるが如く覺え、譯文よく彼大奸物を描き盡せるを以て、頗る面白し。文意また流暢自在、流石に春の屋氏の筆の跡なり。

◎ジャパン、タイムス

英文に精通せるを以て名ある、頭本、武信二氏を記者さしてジャパン、タイムスは、日本人の思想を、外人の間に皷吹せんさするものなり。印刷鮮明、紙質精良、此點を以てしても優に、ジャパン、メイル、ガゼット等に匹敵するに足るのみか、文章さいひ、編輯さいひ、優に一大新聞の地位を占め、日本人の手に成れる英字新聞は、初めてこのジャパン、タイムスを以て外人に示すに足るの面目を供へたりさいふべし。その社說の如き、廣く諸般の問題に渉りて、內外人共に讀むべきの文字あり。吾人は此好英字新聞將來の發達を希望するものなり。

◎新著月刊 第一號

東華堂版

早稻田の靑年有爲の文士を主さし、多くの文士を客さして組織せられたる、丁酉文社より新に、小說、時文批評の雜誌、新著月刊を出し第一號既に出版せらる、其細評は次號。

女界文壇雜俎

三月下旬

◎女子さ美貌　大阪每日新聞　三月廿二日
◎婦女果して養ひ難き乎(女子敎育に就いて)　富山日報　三月廿三日
◎日本女子大學發起大會(詳細記事)　時事新報　三月廿七日
◎家婢の拂底　日刊世界の日本　三月卅日
◎日本女學の構成(上)(長井行)　女鑑　第百廿九號
◎產業上、經濟上婦人の地位　家庭雜誌　第　號
◎家庭さ嫉妬(三輪田眞佐子)　太陽第三卷　第六號
◎そさの濱べも(下田歌子)　同
◎女性祟拜教さ秘密佛教(わ、か)　佛教　第百廿四號

片々

◎女子大學　成瀬仁藏氏發起の日本女子大學校は、貴顯紳士淑女多數者の贊成を得て、爰に公然其創立計畫を發表す。其帝國ホテルに於ける、創立會の席上は、三四上位の縉紳をして、公然女子教育贊成論を唱へしめ、其多數の贊成者は、女子大學設立に兩手を擧ぐるものたるとを證す。この女子大學の設立や、これ眞に明治女學界に一新時代を來たすの好素因歟。吾人は今後日の左券として、同創立會席上に於ける數氏の女學論の要を爰に錄せん歟。

●近衞公爵　曰く兩三年學習院の教育を掌るの經驗上、家庭教育の必要を發見して、之を司るものゝ重に母なる故に、將來善良なる子弟の輩出を望まんとせば、先づ女子教育に力を盡さゞるべからず云々。

●大隈外相　曰く世界の最も文明なる最も强壯なる國民と相競ふと云ふことに就ては、其源泉を養ふべし、其源泉は即ち女子教育なり、故に熱心に成瀬氏の爲めに勞を執つて、出來る丈力を盡して、此女子大學を成立せしめて、將來の繁榮を望み、此大學の力を以て、將來女子教育に及ぼす感化力を益々大にして、我國の女子教育の程度を進歩せしめたし云々。

●蜂須賀文相　曰く女子大學の企は無乃晩きに失するの感あり、文部省に於ても十分保護を與ふる決心なり云々。

●江原素六氏　曰く教育は跛にては詰り國家雄飛すると能はず、よりて女子教育を盛んにすべし。

●島田三郎氏　曰く女子教育は第一技藝的ならんよりも、寧ろ女德を涵養する精神的なれ、第二學科は高く且つ廣きに失せんよりは適切眞摯ならんとを望む。

◎婦女子果して養ひ難き乎　否教育せずして養ひ難しといふ理に非ざるの義を諄々反論して、富山縣下師範學校女子部なきに非ずと雖も、こは特殊の目的を有す、されば、同縣の女子は遂に小學以上の教育を受くる能はざるか、これ啻に女子の爲めの憾事なるのみか、社會進歩に害あり、故によろしく縣立の一女學校あるべし、縣民この設立に應ぜずんば、よろしく有志と計りて一私立女學校を起すべきは、縣下教育家の責任なりと絕叫せるは、富山日報なり。

◎美貌術　英米の女子は相貌の美麗ならんとを欲して、龍腦を用ゐて、皮膚を白くし、ベラドンナなる毒薬を用ゐて、眼光の婉麗なるを計り、而して往々に此等藥劑の爲めに、不具となり、天年を短うするものありといふ。又巴黎の一醫師は年增女子の皺を除きて、若やかに見せん爲めに、兩耳の邊に、刀を入れて小さき幅に皮を削り去り、頰のあたりの皺を延ばして、引き寄せし皮を縫ひ而して疵痕を殘さゞるの外科術に長じたるが故に、治療を受くるの女子少からずといふ。

◎家婢の拂底　日刊世界の日本、家婢拂底の理由を論して曰く、其原因は第一、一般の趨勢、第二、奢侈の流行、第三、工業の發達にあり。容貌の美なるものは靑樓に行き、其美ならざるものは工場に行き、中等社會をして家婢拂底に苦ましむ。古來我邦の清潔なる家庭に於ける主人と家婦との關係は、たゞに金錢の關係、傭者被傭者の關係のみに非ずして、家婢は家妻の見習生、主婦は其教師たりき。然るに今や家婢をして美衣なる家妻たらしむべき、唯一善良の學校は、全く荒廢に歸せんとす、これ實に社會の一大不幸なりと。

◎されど　家婢拂底は、今後いよ〳〵其甚しきを告ぐべく、よりて中等社會は、爲に家婢を傭ふこと能はずして、主婦は自ら薪水の勞に任せざるべからざるに至らんや必せり。

◎英國は女性の國乎○○○○○○○　英國は不思議の國なり、この國は女性を帝王と戴くの世に於て、最も繁盛富榮を來たせり。殘忍暴虐なるメリー女王はしばらく措く。エリサベス女王朝の時代の盛代は、歷史上に光榮を放ち、アン女王の治世もまた之に若く。而して現王ヴイクトリア女王の治世の如きは、英國の文物富榮の最も發達したる時代、其領土の最も膨脹したる時代、而して古來國民の最も太平を喜びし時代にして。日沒するとなき英國領地の民東西南北に悉く女王の治を感謝せり。其文學の如きもエリサベス時代と共に並び稱せられて、英文學史中の最盛時たり。而して其治世の長きも、また英國史中の無比にして、今年に至りて正に六十年に及べり。英國は此治世を感謝し、女王の功德を謳歌せんが爲めに、來る六月の即位六十年紀念祝日に於ては、國民擧りて、女王の万歲を唱へんとす。

◎英國の上下議會　婦人に參政權を與ふることを可決したる所以の理、彼等が英邁善良の政事家たる女王の下に、其治績の善美なるを仰いで、政治の材は人々の天稟才能に在りて、男女性の差異に關せざることを確認せるもの、其重きに處らずんばあらず。

◎英國女皇　天質英邁倜儻、蓋し英國史中稀に見るの賢君なり、ステッドの女皇とウイラードとを合せて、十九世紀の二大偉傑となし、この二女流なるものは、第二十世紀の文化を示導するの人、而して二十世紀は、正に婦人の時代なりと稱するもの、豈に偶然ならんや。

◎千八百三十一年　に於ける英國女子の職業は、僅に五種ありしのみなりしが、千八百九十一年に及んでは、其數百五十の上に出つるに至れりといふ。

時報

◎各女學校の卒業式

●高等女子師範學校第八回卒業式 は三月卅日執行あり。卒業生總數六十四名、其人名は左の如し。

女子高等師範學科卒業生 (氏名いろは順)

岩崎 かの(大坂) 菅 のぶ(愛知) 松山 金樹(高知) 橋本 やす(福井)
土谷 ふで(愛媛) 藤岡 おくり(岡山) 新橋 きく(千葉) 根井 あい(宮崎)
小池 より(富山) 戸次 ひさ(熊本) 南莊 鹿野(靜岡) 天野 きよ(山口)
土肥 八十(神奈川) 築 みよ(秋田) 朝日 利舞(東京) 岡本 かれ(靜岡)
山本 由惠(和歌山) 宮武 みよ(京都) 高山 だい(靜岡) 安谷 けい(京都)

女子高等師範學科撰科卒業生

倉田 やす(長野)

附屬高等女學校補習科卒業生 (氏名いろは順)

小能 登久(埼玉) 三浦 元(東京) 小栗栖 千重(大分) 峯 なほ(東京)
小林 信(東京)

附屬高等女學校本科卒業生 (氏名いろは順)

磯林 龜尾(高知) 吉留 なみ(鹿兒島) 八尾 幸(福井) 飯山 警(東京)
丹治 菊(東京) 松本 澤(岐阜) 犬飼 瑞枝(東京) 立野 つる枝(奈良)
小池 きく(長野) 池上 さみよ(長野) 曾根 榮子(千葉) 赤松 曾代子(靜岡)
今村 たけ(熊本) 坪野 柳(東京) 齋藤 ゑつ(北海道) 橋本 ふみ(東京)
中島 舜(千葉) 北川 郁(東京) 林 恭(東京) 永持 豐(東京)
水野 郁(東京) 長谷川 誠(佐賀) 村井 綾(東京) 淸水 志計(東京)
細川 淑(東京) 大枝 秀(埼玉) 日根野 駒(東京) 折居 留代(山梨)
織田 辰子(東京) 守木 貞(新潟) 川路 進(鹿兒島) 大平 ぎん(東京)
千本 元(東京) 吉田 順(埼玉) 保田 績(大分) 諏訪 房(山口)
吉田 貞(埼玉) 山内 みれ(山口)

●東京女子學院卒業式 四月一日執行、卒業生人名左の如し。

全科卒業生

岡本 薫子 龍田松江子 山本 鹿子

保育科卒業生

山本 鹿子

英語中學修業生

有賀 仲子 古久保文枝子 市川 政子 岸田 福子 櫛部 雪子
正木 秀子 手島 近子 津田 孝子

●彦根高等女學校卒業式 は三月廿五日執行卒業生人名左の如し。

補習學科卒業生

小川 すて 外村 山江

本科卒業生

高橋 芳留 上野 京 宮村 つる 西澤 末尾 上田 愛
石北 よし 富永 隆 大鳥居 てる

技藝專修科卒業生

吉川 ぎん 松下 仲 中島 かず 成宮 すて 青木 ひさ
藤野 たつ

●大坂梅花女學校卒業式 は四月一日執行、卒業生左の如し。

裁縫全科

稻垣 くら(靜岡) 二宮 しな(山口)

邦語全科

林 せん(山形) 堀口 こはる(大阪) 川尻 しげ(三重) 山川 さみ(福井)
山岡 ます(大阪) 藪田 まつ(滋賀) 淺井 しゅん(大阪) 澤山 いさ(山口)
北里 きつ(熊本) 淸家 さち(愛媛)

英語全科

林 せん 本多 かつ(岡山) 山岡 ます 家淸 さち

●共立女子職業學校卒業式 三月卅一日
●東京博愛看護婦學校卒業式 三月廿八日
●浪華女學校卒業式 三月三十日
●橫濱フェーリス女學校卒業式 四月六日

◎日本女子大學校

同校發起會は澁澤榮一住友吉左衛門の兩氏を會計委員に擧げ、なほ他に委員八名を撰擧したり。なほ創立會を三月二十四日午後五時より帝國ホテルに開きて、貴衆兩院議員一同を招待せしに、生憎閉會後の親睦會、政黨會議などにて議員の集會少なく、僅に七十名に滿たざりしは、遺憾なりき。席上內海忠勝(不參に付草稿篠田利英氏代讀)、成瀨仁藏、近衛公爵、大隈伯爵、蜂須賀侯爵、島田三郎、江原素六諸氏の演說あり、了りて立食の饗應ありき。會するもの多くは、該女子大學創立に贊意を表したり。

因に記す、同大學の基本資本金として募集する金額は三十萬圓にして、五十萬

圖を創立設に、餘二十萬圓を基本金に充つるの議算なり。學科程度は高等女學校卒業後三年間の科程にして、本科を家政部、文學部(甲乙二科)、教育部(文科理科)理科部、体育部、音樂部、美術部となし、なほ附屬として、幼稚園、小學校、高等女學校の普通科、工藝、商業、看病の三專修科を設くるよし。其設立地は大阪なり。序に云、前號に成瀬仁藏氏を大阪梅花女學校々長と記したるは誤りにて、同氏は目下該校には關係なし。

◎日本婦人矯風會大會

同會は四月二日の夜、三日の午後より、神田美土代町青年會館にて開會す。

◎岡山高等女學校新設計畫　岡山縣會は高等女學校新設の必要を可決して、知事に建議したるに就き、此程其取調委員八名の任命ありたり。

◎赤間關市の現況　赤間關市立女子裁縫補習學校は、去る廿七年十月を以て設置せられ修業期二ヶ年にして卒業し、既に二回の卒業生を出すに至れり。本年は第三回の卒業期にして其數十五名餘、現在生徒數四十名なり。而して市會は本年度より二百圓の補助を地方費に仰がん筈にて、大に擴張を圖り、市内女子教育の模範となさんとす。今全校の成績を聞くに、規律ある學校教授は未だ市民の嗜好を感ずるの嫌ひあり、自然旧數的師匠の許に通學せしめ、不規則の速成を喜ぶの弊風あるため、降盛の好果を見ずと雖ども、全校は改良速成の教授法を採り、且つ學科及び稗方の科目を設きたれば、却て郡部よりの申込多ければ規模を擴張して、更に寄宿室を設くるに至るべしと云へり。　(門司新報)

◎宮城縣師範學校女子部　の存廢に就きて同縣教育社に諮詢する所などあり、縣會の一問題ともなりしが、いよ〳〵存立に決し、此程生徒募集中なりといふ。

◎臺灣の女子教育

臺灣の女子教育に就ては、其筋に於て先頃來調査中なりしが、今度愈々臺北北門外工兵中隊跡を以て、八芝林國語學校第一附屬學校の分校場となし、女子教育を開始する事となり、目下校舍修繕中なりと。生徒は八芝林國語學校土人生徒の妻子姉妹等にして、既に五十餘名の志望者あるを以て、東京より女教師の來着を待ち授業を始むる筈なりとぞ。

◎日本婦人會婦人の奨學　日本婦人會々主松本愛子は、柳生流の門弟を始め有志婦人より一名にて一錢づゝ集金し、昨日までに金二十圓を取纏め、昨二十五日淺草區芝崎町日輪寺に於て營まるべき　英照皇太后　の御法會費中に入金したるよし。

◎奇特なる婦人　千葉縣下香取郡佐原町の柏崎靜氏の養女たき子は、愛孫清と呼べる兒の學齡に入りて、今度佐原尋常高等小學校に入學するに際し、自分の貯金の内より賞金として百圓を寄附したりといふ。

◎岡山地方婦女子の職業　備前國上道郡の各地方に於ける中等以下婦女子の職業に三種あり。機織、簡の編笠、麥稈眞田製造是れなり。機織は通常木綿仲買人より、紡績糸を請取りて、織るものにして、普通　反分の糸を請取る時は、大概四日足らずに仕上げて、貳拾四錢を得、一日六錢餘の賃錢となり、又簡笠は普通の者にして、一日五枚を編み、一枚の價一錢二三厘より一錢七八厘までにして、一日六七錢を得るの割合なり、又眞田製造は一組(三十五尋)を製すれば、拾錢より十五六錢を得、然れども一日に之を爲し得るに至るは、餘程の熟練を經たるの後に非ざれば能はず。今三日にして二組を編み、一組十二錢とすれば、一日八錢を得る是れ三者の中に於て利得最も大なれども、手工の上達し難きと、原料たる麥稈の不充分なる等の爲め左迄盛んならず。長岡驛同製造所の如きは、目下麥稈缺乏を告げ、女工十餘名執業なし居るのみにて、萎微振はず。機織は中部地方最も盛んにして簡笠は各地方共行はれ、岡山西大寺等より買求に出掛くる商人多しとぞ。　(山陽日報)

◎女子語學校　築地新榮町なる同校は高等小學卒業以上の我國子女をして佛、英、獨の外國語、交際、家政、作法等を學ばしめ、傍ら本邦學中須要の諸科目修身、和漢文、地理、歴史、活花、家政、裁縫等を兼習するの便を與へ、專ら本邦中流社會以上の子女教育を主とし、教師は外國人は佛人三、英人三、獨人一、本邦人は女子高等師範學校卒業生戸澤カズ子、女ー職業學校卒業生山本ナカ子の兩人ありて、昨春より、大に校規に改良を加へ、全く宗教と分離したれば、宗教的臭味もなく外國語を研究し傍ら本邦學中須要の諸課目兼習を望む子女には便利なりと。

◎ノースフイールド女學校の現況　米國ノルスフヰルドなる、大說教家ムーデー氏の女學校は、貧に學資なき女學生を教育する者にて、頗る有名の學校なるが、今回生徒三百六十一名の入學者ありしに、此等の女學生は一人に一ヶ年二百弗の經費を要する由にて。内百弗は學校より給興し、他の百弗は各自の勞働より收得する覺悟なる積りなれば此の爲めに要する費用も少なからざるにて、ムーデー氏は此等の爲めに目下奔走盡力中なりと云ふ。　(基督教新聞)

花さかば告けよといひし山守の
　來る音すなり馬に鞍置け

櫻ばな咲きてむなしく散りにけり
　よしのゝ山はたゞ春の風

前南禪寺管長 松山舜應大禪師校閲
現東福寺管長 濟門敬沖大禪師校閲
故相國寺管長 荻野獨園大禪師口授
鈴木子順禪師筆記

禪宗眼目

和裝美本
本月下旬發行

本書は近世の大宗師故荻野獨園老師が身後に遺したる唯一の寶典、臨濟禪の眞面目を描きたる稀世の珍書、纔に剞劂に上りて所謂頭上雷の轟くが如く一喝耳を掩ふの暇なく、目前電の閃くが如く一捧身を轉ずる所なき臨濟禪の宗風、百燭光を以て照すがごとく一見透徹遺憾なかるべし、加ふるに南禪寺派の碩學子順禪師が縱横無碍の妙筆を揮つて叙述し、東福南禪兩管長の校閲及び評語を加へたるものなれば其價値更に贊頌するを須ゐず、苟も生死岸頭に大自在を得むと欲するの士は必ず先づ此書に參せよ

發行所 麻布市兵衛町二丁目九番地 梅花書院

發賣所
神田區駿河臺西紅梅町 光融館
京橋區銀座尾張町 東海堂
麻布區飯倉町 森江書店
神田區表神保町 東京堂
芝區露月町 鴻盟社
京橋區三十間堀 明教社

新刊廣告

☞ 女學校教科書 ＝ 女子賞品 ☜

華族女學校學監
正五位下田歌子述

家庭要訓

美麗上裝全一冊
正價金二十錢
郵税金四錢

本書は、婦女のつとめ、即ち其家政を整理する事より始めて、子女が、家庭教育の一斑等、其實地に就きて、教授せられたるを、極めて、卑近簡潔に書き寫されたるものなれば、女學校の教科書及び參考書、幷に賞與品として尤も適當の新著なり。

錦織竹香女著

普通裁縫書

上裝美本全三冊
正價 金六十五錢
郵税 金八錢

本書は、發行以來大に好評を蒙り第一版第二版は賣盡し今度第三版を發賣せり續々御採用を乞ふ。

發兌
東京市神田區通新石町二番地
同文館
大坂市東區備後町四丁目
吉岡平助

義捐者諸君に敬告す

此度府下巣鴨村六百五十六番地通稱庚申塚に宅地五千六百坪、建家(西洋館及日本家双方二階造)一百二十坪を購入致し爰に四月新學期より移轉、尚ほ追々增築可致計畫に御座候類燒後一週年にして此の良好の場所を得候事、偏に諸君仁慈の致す所たり。謹で敬告し併せて無限の謝意を表す

明治三十年四月

明治女學校

新入學希望者に告ぐ

當四月以後府下巣鴨村に新校舍を設置し新入學を許可す。此地本鄕區を距ること遠からず、通學の便なきにあらずと雖ども、可成く寄宿篤學を可とす、入校希望の人は來る四月十五日迄に申込まるべし。

東京府下巣鴨村

明治女學校

明治女學校圖書寄贈報告

第五回

一大小説家文集●人著述家文抄●オールド、フェイス、イン、ニユー、ライト●細菌寫眞二部●傳染病研究講義　著者　中川愛咲殿

一植物病理學上下一部●日本博物學年表三部●植物自然分科檢索表五部　著者　白井光太郎殿

一日本風景論●地理學講義　著者　志賀重昂殿

一經濟學之原理●公債論　出版者　湯淺治郎殿

一新編希臘歴史　著者　桑原啓三殿

一通信女學講義合本全部●婦人のかゞみ●祝ひ歌●實用看護法●ありふれ物語●婦人立志編　福永文之助殿

一埃及近世史　著者　柴四朗殿

一佛教通俗講義全部●大乘起信論和解●逍遥佛教事情●和漢高僧傳●佛教大家論集十二冊　著者　織田得能殿

一本分論　著者　櫻井恒太郎殿

一婦人科準繩　著者　柴田耕一殿

一實驗化學　著者　西川麻五郎殿

一普通道徳學　著者

一寄贈者著述商偶見●榮花物語全部●寄贈者著英文日本の芝居●ヴィクトリヤ朝の文學●晩近經濟の進步●社會主義の宗教●ミルトン詩集●米國大家文集●佛語會話篇●會話篇●以佛作曲大家傳　中川恒治郎殿

一和漢合璧文章軌範●枕草子春曙抄●俘擄記事●日本地理●八大家文讀本●大日本植物誌略●孟子●館本十七帖●顔眞卿放生池帖●數學問題●褚遂良孟法師碑外一冊　山口よし子殿

一顯化非染之發達　著者　留岡幸助殿

一心理學講義●日本倫理學　著者　牧瀬五一郎殿

一學校衛生法綱要　著者　瀬川昌考殿

◎社告

一、今や正に學事上の新學年は來らんとして、各府縣の諸種女學校共に、多數の新卒業生を出たることなるべきに就ては、此際本誌は、其卒業式日、卒業生人名等、遺漏なき樣揭載せん爲、諸方の通信を俟つ。

一、又何處の女學校共に新入生募集あるべきの際なれば、其學校の現況槪畧通信あらは、本誌は喜んで之を揭載して、其學校及入學志願者双方の便利を謀るべし。

一、各地方女學界の時々景况に就きて有志の通信を望む。

明治廿七年二月十四日内務省許可
明治三十年四月十九日印刷
明治三十年四月十日發行

發行兼編輯者 東京市麹町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 根岸高光
發行所 東京市麹町區下六番町六番地 女學雜誌社
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場 (電話本局十九番)

巖本嘉志子

明治廿五年三月十五日遞信省認可



明治廿五年三月十五日遞信省認可

